

マカベ後書

「マカベ後書」は最初からギリシャ語で書かれ、キレネのヤソンの筆に成り今は失われてい
る五巻物のある書を、抜萃集録したものである。

第一章

イエルサレムのユデア人がエジプトのユデア人々に送りし書簡二通

一 あまねくエジプトに在るユデア人1) 同胞2)に、イエルサレム及びユデアの地3)にあるユデア人4)同胞挨拶5)し、且平安幸福6)を祈る。ニ願わくは天主汝等に恩寵7)を賜わり、その忠信なる僕アブラハム、イサーク、及びヤコブと結び給いし契約8)を思い出で給いて、三汝等一同に、彼を崇め、惜しみなき心もて悦び勇みてその御旨9)を行わんとの心を与え給わんことを。四願わくはその律法と誠命10)とに対して、汝等の心を啓き、汝等に平安を賜わらんことを。五願わくは汝等の祈

第一 章 1) プトレメウス一世王は西紀前三二〇年頃十万以上のユデア人をエジプトに引いて行つたが、彼らはヘリオポリスのそばのレオントポリスに、イエルサレムの聖殿に模して神殿を建て、そこで祭祀を行なつた。こうして利一七・三及び申一二・五以下の記事に反し一離教ができた。

祈を聞き容れ、汝等に對して御心を和らげ、災禍の時に汝等を棄て給わざらんことを。六かく我等今ここに、汝等のため祈るなり。^セ第百六十九年、²⁾ デメトリウス³⁾ の治世、ヤソンが聖地と王国とに背きし時より、累年我等に臨みし患難と暴虐との中にありて、我等ユデア人は汝等に書を送れり。⁴⁾ 八彼等門⁵⁾ を焼き払い、辜なき血を流したるにより、⁶⁾ 我等主に祈りしに、聞き容れられしかば、犠牲と良き麦粉とを獻げ、燈明を点してパンを供えたり。⁷⁾ されば今より汝等力スレウの月に幕屋祭の日を祝えかし。⁸⁾ ⁹⁾ 第百八十八年、⁹⁾ イエルサレム及びユデアに在る民、元老院、ならびにユダ、¹⁰⁾ 注油せられたる司祭等の血統にて在るユデア人等に挨拶し、健康を祈る。二天主に大なる危

²⁾ 西紀前一四四年。— ³⁾ ます西紀前一四六年から一三八年までシリアを治め、次いでパルト人に釈放されてから、再び一三〇年から一二五年まで治めた。喀前一一・一九。一四・一三参考。⁴⁾ 本四・七以下参照。⁵⁾ 聖殿の。喀前四・三八参考。⁶⁾ 喀前一・三七、六〇参考。⁷⁾ 喀前四・四九—五六参考。⁸⁾ ユダ・マカベオがそう定めた。喀前四・五九参考。—⁹⁾ ここから第二の書簡になる。—西紀前一二四年。—¹⁰⁾ ユダ・マカベオをさすのであるう。¹¹⁾ ユデアの有名な哲学者で聖書解釈者。

急より救われ、我等かかる王⁽¹²⁾と戦い得たることを、深く感謝し奉る。ニそ
れ、彼は我等及び聖なる都に向かいて攻め寄せたる者等を、ペルシャより逐⁽¹³⁾
いだ出し給えり。三蓋は彼自ら総帥として、雲霞の如き大軍を率いペルシャに來り
し時、ナネア⁽¹³⁾の司祭等の計略に欺かれ、ナネアの神殿において殞^(たお)れたればな
り。四即ちアンティオクスその友等と共に、恰もその女神を娶らんとするが如くにして、
その婚資の名目の下に多額の金を取らんものと、その処に來りし
に、五ナネアの司祭等之を提供して、彼少數の従者を連れ殿内に入りし時、彼
等神殿を閉鎖しけるが、六そはアンティオクスの入りたると同時なりき。次い
で彼等神殿の秘密戸を開きて総帥と之に従える者等とに石を抛ち、その四肢を
斬り放ち、その首を刎ねて、之を外に投げ出したるなり。七かく不敬なる徒輩
を付し給える天主は、万讚むべきかな。八されば我等、カスレウ月の二十五日
に、聖殿の祓清を祝わんとするにあたり、之を汝等に報ずる必要ありと思えり、
そは汝等もまた幕屋祭の日と、ネヘミアが聖殿と祭壇とを修築したる後犠牲を

テイオ
クス・
エピフ
アネス
喀前六
下参照
12) アン
13) アナ
ニス即
ちヴィ
ーナス

一五
一四
一三

一六
一七
一八

献ささげたる時に与えられたる火ひ¹⁴⁾の祭日とを祝いわわんがためなり。一九すなわ即ち我等の父祖ふそがペルシャ15)に曳ひき行ゆかれたる時、その頃天主まつを祀まつる転掌やくめにありし司祭しき等たち、ひそかに祭壇さいだんより火ひを取り、或る谷たにの水涸みおかれし深ふかき井いのある所ところに隠かくし、その中に保存し置きたれば、その在所ありかは誰なれにも知しれざりき。三〇然るに幾多いくたの歳とし月つきを経へて天主てんしゅネヘミアがペルシャ王おう¹⁶⁾によりて遣つかわさるるを嘉よしと見給みたもうに及および、彼かれその火ひを探たずねしめんとて、之これを隠かくしたる司祭等しきあらわの孫等まごらわを遣つかわしけるが、彼等かれらの我等われらに語かたりし如ごとく、火ひは見当みあたらさして、ただ濃こき水みずのみありしかば、三司祭しさいネヘミア17)彼等かれらに命めいじて之かれを已おのが許もとに汲くみ來きたらしめ、載のせられたる犧いけス。性にえに向むかいて、薪たきぎにも、その上うえに載のせられたる物ものにも、この水みずを灌そそぐべきことを命じたり。三三よりてかくなしたるに、折おりしもそれまで雲くも間に隠かくれおりし陽輝ひかりき出いだるや、大なる火燃ひもえ上あがりかば、皆々驚嘆みなみなきようたんせり。三司祭等しきあらわはみな、その犧牲いけにえの焼き尽つくさるる間あいだ、ヨナタス18)の先立さきだちて誦となうるに他の人々応ひとびとこたえつつ祈いのり祷ささを獻ささげたり。三四さてネヘミアの祈祷つけは次の如ことくなりき。曰いわく、万物ほんぶつの創そうあるヨナ

14) 利六・

一二。代

下七・一

参照。

15) バビロ
16) アルタ
クセルク

セス・ロ

ンギマヌ

人。

17) ネヘミ

アはダウ
イド家の

人。

18) 尼一二

・一一に

タス。

19) 申三
一五。

○・三

造者、主なる天主よ、汝恐るべき者、強き者、義しくして憐憫深き者よ。汝は
 独り慈しみ深き王にして、^{二五}ひとり卓れ、^{ひとり}義しく、全能永遠にて在す。汝は
 イスラエルをすべての禍惡より救い給い、我等の父祖を選みて之を聖ならしめ
 給えり。^{二六}願わくは御民イスラエル全てのためなる犠牲を受納め給いて、汝の
 分たるもの護り、之を聖ならしめ給え。^{二七}我等の散らされたる者を集め、異
 邦人の奴隸となれる者を解放し、賤しまるる者憎まるる者を眷顧み給え、これ、
 異邦人等も汝が我等の天主にて在すことを知るに至らんためなり。^{二八}我等を虐
 ぐる者、また傲りて我等を辱しむる者を懲らし給え。^{二九}願わくはモイゼの云い
 し如く、汝の民を汝の聖所に植え給えかし、と。¹⁹⁾ ^{三〇}さて司祭等は、犠牲の焼
 き尽さるるまで、讃美の歌を唱いけるが、^{三一}その犠牲の焼き尽さるるや、ネヘ
 ミア残れる水を大なる石の上に注ぐべしと命じたり。^{三二}よりてかくなしたるに
 之より焰燃え上れり。されどそは祭壇より輝き出でし光によりて搔き消された
 り。^{三三}然るにこの事知れ渡るに及びて、曳き行かれたる司祭等の火を隠したり

し廻に、水湧き出で、ネヘミア及び之と共にありし者等、それに
 よりて犠牲を潔めたる由、ペルシャ王にも伝えられければ、²⁰⁾
 三四王、事の次第を熟考し、且詳細に取り調べ、やがてそのありし
 ことの証拠として、そこを聖域となしたり。²¹⁾また彼は調べ終り
 たる後、多くの賜物や種々の贈物を司祭等に与えけるが、それら
 は彼手ずから之を取りて彼等に分つたり。²²⁾ネヘミアはこの地をネ
 フタルと名づけぬ。之を解けば潔めの義なり。されどそは多くの
 者にネフイ²³⁾と称ばる。

第二章

第二書簡の続き——流謫に際してイエレミアが契約の櫃などを隠したこと——著者の序言

一さて、預言者イエレミアの記録¹⁾を見れば、既に述べたる如く
 彼が移さるる人々に向かいて、火を取れと命ぜしことあり、即ち
 彼そを移さるる者に命ぜしなり。彼は彼等が天主の誠命を忘る

²⁰⁾本章一九節とその註
 参照。[—]²¹⁾ギリシヤ語
 本は「εἰρήναι」。ある
 写本には「εἰρήναι」ま
 たは「εἰρήναι」とある
 が、これはペルシャで
 產する日光の作用によ
 り燃えやすい油のよう
 な物質である。

第二章

本節及び四節
 にあるイエレミアによ
 る、もしくは彼に就て
 の記録は残つていなし

ることなく、金銀の偶像とその美わしきとを見るも、心に迷うことからしめんと、これに懇ろなる勧告を与え、^ミその他これに類することを語りて、^ミ苟且にもその心より律法を離さざらんよう、彼等を励ましたり。^四なお、この記録の中には、預言者が已に下りし天主の御答に応じ、かのモイゼが登りて天主の嗣業の地を見たる山に至るまで、幕屋と契約の櫃とを、^五彼に従い携えゆくべきことを命ぜし次第²⁾あり。^六イエレミアその地に到りしに、一つの洞窟見当りしがば、彼これに幕屋と櫃と香台とを入れてその口を塞げり。彼に隨い行きし人々の中、数人その場所に目印をつけんとて近づきけるが、之を見出すこと能わざりき。セイエレミア之を知るや、彼等を咎めて云いけるは、かの場所は、天主がその民を再び集めて、之に御眼をかけ給うまで、知られずにあるべし。八その時至らば、主之を明し給わん、しかしてそのモイゼにも示し、またサロモンがその地大なる天主の為に聖別せられんことを祈りし時にも現し給いし如く、主の榮光現れ、雲あるべし。^九蓋は彼偉大⁴⁾。

事によればイエレミアは契約の櫃をネボ山の洞穴に隠した。ネボ山については申三二・四九参照。³⁾王上八七・一。
• 一〇以下。代下⁴⁾八節にあるサロ

なる智慧もて行い、いかにも智慧ある者の如く、聖殿の奉獻と竣成との儀

モン。一〇五利

牲を獻げたればなり。一〇またモイゼが主に祈りしに、火天より下りて燔祭

九・二四。

の牲を燒き尽したる如く、⁵⁾ サロモンも祈りしに、火天より下りて燔祭の

六。一七代下

牲を燒き尽したり。一一なお、モイゼは云えり、罪祭の牲は食せられざるが

七・八以下。

故に、燒き尽されたり、と。⁶⁾ 一二同様にサロモンもまた、奉獻を八日に亘

八) この両書は

りて祝えり。一三この事は載せてネヘミアの記録と回想録と⁸⁾ にあり、彼

九) この両書を

が図書館を設けて、預言者等と、ダヴィドとの書、諸王の書簡、及び奉納

十) フィリオンの

物に關る書類を諸國より蒐めたることもまた然り。一四更にユダ⁹⁾ も同様に、

マカベオをさ

我等が遭いし戦争の間に散り失せたるかかるものを悉く集めしかば、それ

十一) 人もある。

らは我等の許にあるなり。一五されば汝等もし是等を望むならば、そを汝等

十二) 人もある。

に、汝等に送る書を錄せり。されば汝等もし同じ日に之を行ふならば、幸

十三) 人もある。

甚なり。一七さて天主は、その民を救い、嗣業の地も、王国も、司祭職も、

十四) 人もある。

一八 聖所も、一同に再び与え給いたれば、一八その律法を以て約束し給いし如

く、やがて我等を憐み、天が下なるすべての國より聖なる所へ、集め給

わんことを、我等は望み奉るなり。一九蓋は主大なる危難より我等を救い
出し、且その処¹⁰を潔め給いたればなり。二〇さてユダ・マカベオとその
兄弟等とに關する事柄に就きて云わば、大聖殿の祓清、祭壇の奉獻、
三ならびに高名者¹¹アンティオクス及びその子エウパトルとの戦争、
三またユデア人のために雄々しく戦いたる人々に天より下りし現象、¹²
かくて彼等小人數なるに全土を掌中に收め、外夷の軍勢を敗走せしめし
こと、二三天下に聞えし聖殿を取り戻し、都を救い、廢されありし律法を
再興せしこと、これらは主が仁慈の限りを尽して彼等を眷顧み給いしに
由るものなるが、二四こはキレネ¹³のヤソンによりて五卷の書に括められ
たるを、¹⁴我等は一巻の書に要約めんと試みたり。二五即ちその書の大部
なるを慮り、事柄の夥しきために、史実を物語らんとする人々にとり

10) 聖殿。——11) エ

ピファネス。

12) マカベオの指揮の下に御民が救われるため天

主の直接のおん助けがあつたと

いう種々の明白な不思議。

13) エジプトのキレネ市にはユデア人が多數住んでいた。——14) ヤ

ソンとその書のことは今ではもうわからない。

三六
 三七
 三八
 三九
 二〇
 二一
 二二
 二三
 二四
 二五
 二六
 て不便なるがゆえに、二六我等は實に、読まんとする者のためには心の楽しみとなるよう、勉学する者のためには、一入容易に記憶することを得るよう、且すべての讀者が利益を得べきように、心がけたり。二七この抜萃要約の仕事を企てたる我等にとりては、もとより是は容易ならざる業にして、幾多の徹夜と汗とを伴うものなりき。二八されど我等は、饗宴を設けて他人の好みを満足せんと努むる者の如く、多くの人々のために、喜んでその労を執るなり。二九個々の事實に就きての詳報は、之を原著者に委ね、¹⁵⁾我等は専ら所定の目的に従いて、簡約せんことに努む。二〇即ち新らしき家を建つる棟梁は、構造の全般に心を配らざるべからざれど、色を塗る任に當る者は、ただその裝飾に適する所を工夫すべきのみ。我等につきても、是の如く判断せざるべからず。二一實に、資料を集め、文体を整え、個々の点を詳細に論ずるは、歴史の著者の任務なり。二二されど抄録する者には、語を短かくすることに努めて、事柄の長々しき叙述を避くるは、容されざるべからず。二三されば我等これを旨として、叙述に

すすべてを信頼するに足るものと仮定してある。¹⁵⁾彼は

取りかかり、以上を序言として述ぶるに止めん。蓋し叙事を簡潔にせんとしながら、序言を冗長にするは愚かなればなり。

第三章

ヘリオドルス、聖殿の宝を奪わんとし、天主の威力に撃たれて倒れ、大司祭の祈禱によりて癒さる

一 さても聖なる都に人々全き平和の裡に住みて惡を憎む心を有し、大司祭オニア¹⁾が敬虔なるに由り、律法もまたなお極めてよく守られ居りし頃には、諸王諸侯²⁾さえも、この地を此上なく尊ぶべきものとなし、聖殿に多くの物を奉納して光榮を添うるに至り、アジアの王セレウクス³⁾は、己が収入の中より、犧祭の執行に要する一切の費用を、出したるほどなりき。

四 然るにベンヤミンの族にして、聖殿の司⁴⁾の任にあ

第三章 ①西紀前一九六年大司祭となり、シリアの宮廷でさえその敬虔のゆえに深く尊敬されていた。ここに述べてある出来事は略前一・一〇の時のこと。²⁾アントレメウス一世、アントレメウス三世など。³⁾アンティオクス大王の後継者でアンティオクス・エピファネスの前任者。⁴⁾ヨゼフス・フラヴィウスの考えによれば、聖殿の宝庫の司であると。

りレシモンという者、大司祭の反対あるにも拘らず、市街にて或る不正をな
しとげんとして、争いを起しけるが、五オニアに勝つこと能わざりしかば、タ

ルセアスの子にして当時ケレシリア⁵⁾とフェニキアとの総督たりし、アポロニ

ウスの許に至りて、ハイエルサレムの宝庫には無数の金錢充満ち、犧祭の費用
に關係なき公共の富は無量にして、之を悉く王の手に收むるも難きにあらざる

べし、と彼に告げたり。セアポロニウス、打ち明けられたる金錢のことを王に

伝うるや、彼は己が財政を掌れるヘリオドルス⁶⁾を召し、前述の金錢を搬び來

れと命じて之を遣せり。ハイリオドルスはいかにもケレシリアとフェニキアと

の諸市を巡歴るかの如くに見せかけて、直に旅立ちけるが、実は王の志を遂げ

んためなりき。九さて彼ハイエルサレムに至り、街にて大司祭に快く迎えらるる

や、聞き及びたる金錢のことを語り、己が来れる理由を明かし、実際に果して

然るやを質しけるに、一。その時大司祭説明して、それが寡婦と孤児との扶養の

ために貯えられたる手當なること、二。無道なるシモンが伝えたる中の若干は、

⁵⁾しば

聖地を意

味する

⁶⁾間もなくセ

レウクス四世

を暗殺したへ

リオドルスと

同一人らしい

。

九

八

七

六

五

トビアの子たる位高きヒルカヌスのものにして、その全額銀四百タレント及び
 金二百タレントなること、⁽⁷⁾ 一二されどその尊嚴と神聖との故に、全世界に敬ま
 われ居る所なる聖殿に、信託したる人々を欺くは、全く許すべからざることなど
 を告げしが、^(二) 彼は王より命令を受けたるが故に、是非ともそれを王に引き渡
 さざるべからず、と云えり。^(一) かくてヘリオドルスは、定めたる日に、之を処
 分せんとて中に入りしかば、全市の驚愕は一方ならず、^(二) 司祭等は司祭服を着
 けて祭壇の前に平伏し、天に向かいて、託されたる物につき律法⁽⁸⁾ を定め給い
 し者に呼ばわり、之を寄託したる人々のために無事に保ち給わんことを祈れり。⁽⁹⁾
 二六この時大司祭の顔を見し者は、誰しも心を痛めたり、蓋はその面とその色の
 変れると、心中の悲痛をあらわしたればなり。^(一) 実にこの人には悲愁溢れ、そ
 の身震い戦けるにより、彼の心の抱ける苦惱、これを見る人々に明らかなりし
 なり。^(二) 他の人々もまた家々より出で来りて群れ集い、共に祈り願えり、そは
 その処、^(三) 将に侮辱を蒙らんとしたるがゆえなり。^(四) 女たちは胸に毛衣を巻き、

○銀一
 タレン
 トは約
 一八〇
 ドル
 金一タ
 レント
 は約三
 万ドル
 利六・
 二・七。
 二。出二
 (8)

共に街衢を進み、閉じ籠れる処女等さえも、或いはオニアの許に、或いは石垣の所^{とこ}に走り行き、或いは窓より望み見て、みな手を天にさしのべて哀願せり。三實にさまざまの人の打ち混れる群衆と、死ぬるばかり苦惱せる大司祭との期待は、憐憫を催さしめたり。三かくこの人々全能の天主を呼びて、己に託せられたる物が、信託したる人々のために、全く損われず保たれんことを祈り求めたり。三されどヘリオドルスは、己が決意したる事をその処にて遂行せんとして、自らその親衛兵を率いて宝庫の辺に来れり。三當然に全能なる天主の靈、ありありとその偉大なることを示し給いしかば、敢て彼の命に従いし者、皆天主の威光に打たれて倒れ、失神と恐怖とに陥りたり。三即ち美々しき鞍敷に飾られたる一頭の馬、恐ろしき一人の騎士を乗せて、彼等に現れ、前脚にて激しくヘリオドルスを突き倒しけるが、それに乗れる者は黄金の鎧を着けたる如く見えたり。三ほかにまた、美しくして強く、光り輝きて、美服¹⁰を纏える二人の若者も現れ、彼の傍に立ちて左右より鞭打ち、絶えず打擲して多く

9)ヘリ
オドルス。

衣服の
10)鎧や
人間で、
彼らが
なかつ
たこと
を暗示
するつ
たり。

9)ヘリ
オドルス。
衣服の
10)鎧や
人間で、
彼らが
なかつ
たこと
を暗示
するつ
たり。

二七

の傷を負わせたり。二七ヘリオドルスは忽ち地に倒れたり、人々は深き昏冥に陥れる彼を

抱きあげ、之を昇台に載せて搬び出せり。二八かく天主の威力、明らかに顯れ、多くの先

駆と親衛兵とを引連れて、前述の宝庫に入りし者は、誰も之を助くること能わずして、

運び出されたり。二九實に彼は天主の威力に擊たれ、物も云い得ず、癒ゆる望みも全く絶

えて、横たわれり。三〇されど人々は、その所にかくも光榮あらしめ給える主を讃め頌え、

少時前まで恐怖と混乱とに満されたりし聖殿、全能なる主の現れ給いしに由りて、喜び

樂しみに満されたり。三一時しもヘリオドルスの友數人、將に息絶えんとする者に生命を

賜わらんことを、至高者に祈り求むるよう、急ぎオニアに乞いければ、三二大司祭も、

或いはユデア人がヘリオドルスに何等かの危害を加えしものと、王の疑うことあらんか

を慮りて、その人の回復のために、平癒の犠牲を捧げたり。三三然るに大司祭の未だ祈

り終らざるうちに、同じ若者同じ服装にてヘリオドルスの傍に立ち現れ、云いけるは、

司祭オニアに感謝せよ、蓋は主の汝に生命を賜いしは彼のためなればなり。三四汝は天主

より膺懲を受けたる者なれば、天主の偉大なる御業と御力とをすべての人々に伝えよ、と。

三四

三三

三二

三一

二九

二八

三五

かく云い終るや、彼等はもはや見えざりき。三五ヘリオドルスは天主に犠牲を獻げ、生くるを許し給える者に大なる誓願を立て、またオニアに感謝し、その軍勢を引連れて王の許に帰り、三六目のあたり見し偉大なる天主の御業を、すべての人間に証言せり。三七さて王ヘリオドルスに向かいて今一度イエルサレムに遣すに適當なるは誰ぞやと尋ねしに、彼云いけるは、三八汝にもし誰か敵あるいは汝の国を窺う者あらば、これを彼処に遣し給え、彼たとい遁るともいたく鞭打たれて来るべし、彼処にはまさしく何か神の力潜めばなり。三九蓋し、天に住居を置き給うその者、自ら彼処を見張り護りて、害をなさんと来る者を擊ち滅ぼし給うなり。11四〇ヘリオドルス及び宝庫の保存に関する事の次第は即ちかくの如し。

三九

三八

三七

三六

第四章

オニア、王に頼る一ヤソン及びメネラウスの野心と奸悪一オニア欺き殺さる

一一一方、金錢のことを密告し祖国を売りたる前述のシモン1)は、

1) 第四章 1) 本三・四参照。

11)かくてヘリオドルス同様、ニカノル(本八・三六)もアンテイオクス・エピファネス(本九・一三一七)も、イスラエルに最高の神天主のご加護があることを証する。

オニアのことを、恰もその人がヘリオドルスを唆してかくなさしめ、禍の根なるが如く、悪しざまに云いなし、²⁾ 街の恩人、国民の擁護者、天主の律法の熱心家たる彼を、敢て國賊と呼びたり。³⁾ それのみか、敵意募りて、シモンの親友数人により殺害さえ行わるるに至りしかば、⁴⁾ オニアかかる鬭争の危険なるを慮り、且、ケレシリリア³⁾ とフェニキアとの総督なるアポロニウスが憤激してシモンの惡意を煽動せるを思いて、王の許に赴きしが、⁵⁾ これ、己が同胞を訴えんためにはあらで、全人民一般の福利を思ひてなりき。⁶⁾ 盖は王の賢慮なくば、事を平和に解決することも、シモンがその狂愚をやむることも、不可能なりと見たればなり。しかるにセレウクスの歿後、高名者とよばれたるアンティオクス王位に即くや、オニアの兄弟ヤソン、大司祭の転を狙い、⁷⁾ 王の許に至りて、これに銀三百六十タレンントと、⁴⁾ 他の歳入よりの八十タレントとを約し、⁸⁾ その上もし体育館⁵⁾ と青年訓練所⁶⁾ とを建て、またイエル

²⁾ オニアがヘリオドルスに金のことを密告し、またヘリオドルスがオニアに雇われた人々に討たれたといふ噂を拡めた。

³⁾ 本三・五一とその註参照。

⁴⁾ 本三・一一とその註参照。

⁵⁾ 体育館とは一般に大人の体育場をいう。喀前一・一五参照。

⁶⁾ 青年訓練所とは青年達が訓練

一〇 サレムに居る人々にも、アンティオキアの市民権^{レ ミンケン}を与うることを許^{あた}する。さるるにおいては、更に百五十タレントを贈^{おくる}べしと約^{やく}したり。

之を許^{ゆる}し、彼^{かれ}その軒^{しょくけん}權^{かくとく}を獲得^{かくとく}するや、直^{ただち}にその同国人^{どうこくじん}の間に異教徒^{あいだい いきょうと}の風習^{ふうしう}を取り入れんと努め、二^二かの友誼^{ゆうき}と同盟^{どうめい}とを結^{むす}ばんため、ローマ

人の許^{ゆる}と正^{ただ}當^{とう}に遣^{つかわ}されたるエウポレムス⁸⁾の父なるヨハネにより、王^{おう}

等⁹⁾が情^{なき}もてユデア人等¹⁰⁾に許^{ゆる}したり事を廢^{はい}し、市民^{しみん}の権利^{けんり}を無視^{むし}して、邪^{よこしま}なる制度^{せいど}を設^{もう}けたり。二^二實^げに彼^{かれ}は大胆^{だいへん}にも、かの城^{しろ}の真下^{ました}に体^{たい}育^{いくかん}館^を建^たて、行^{ぎょう}状^{じょう}の優^{すぐ}れて良^よき青年^{せうねん}をさえ魔窟^{まくつ}に入^いらしめたるなり。

三^三されど事^{こと}はそれのみに止^{とど}まらず、不敬^{ふけい}にして司祭^{しさい}ならざるヤソンの憎^{ぜん}むべき前代未聞^{せんだいみもん}の奸惡^{かんあく}のため、異教^{いきょう}及び外國^{がいこく}の風習^{ふうしう}はますます多く甚^{はなはだ}しくなるばかりなりき。一^四されば司祭等^{しさいたち}は最早^{もはや}祭壇^{さいだん}の軒^{つとめ}務^むにいそしむことなく、聖殿^{せいでん}を輕^{かる}んじ、犧^ぎ祭^{さい}を怠^{おこた}りて、競技^{きょうぎ}や、不正^{ふせい}なる演劇^{えんげき}や、円盤投^{えんばんとう}に加^{くわ}わらんと馳^ゆせ行くに至^{いた}れり。一^五彼等^{かれら}は祖国^{そくとも}の名譽^{めいよ}

を受け、慎^{つつ}しみを捨^すてるよう仕込^まれる学校。一^九この市民権はローマのそれと同様^{どうよう}さまざまの特權^{とくしゅん}を与^{あた}る。一^八なかんずくアンティオクス大王^{だいおう}。一^九喀前八・一七参照。

「彼らを（鍔^{つば}広^{ひろ}の）帽子^{ぼうし}の下^に集め」。^{10) ギリシャ語本}この帽子^{ぼうし}はマー^キュリ^ー神^{じん}のしるし

など¹¹⁾無視して、ひたすらギリシャの榮譽を此上なきものと尊重したるなり。¹⁶⁾このために彼等は危険なる競争心を持つに至り、曾て彼等の敵にして殺害者なりし者等の慣行を熱心に守り、万事彼等に肖からんと努めたり。¹⁷⁾それ、天主の律法に背きて、不敬なる振舞をなすは、罰を免るること能わず。されどこれは、後に至りて明らかになるべし。¹⁸⁾茲に五年毎に行わるる習慣の競技、¹²⁾ティロに行われ、王も臨席したる時、奸惡なるヤソン、ヘルクレス¹³⁾に奉納せしめんと、不逞なる徒輩に銀三百ディドラクマ¹⁴⁾を宰領せしめて、イエルサレムより遣しけるが、宰領する者等は、その儀然るべからざればとて、これを奉納のために出さず、他の用に供せられんことを請いたり。¹⁹⁾さればこれは、それを送りし者はヘルクレスに奉納せんと献げしなれど、宰領せし者等のために、三段櫻船の建造に宛てられたり。²⁰⁾茲にムネステウスの子アポロニウスが、プトレメウス・フイロメトル王の大官等¹⁵⁾のために、エジプトに遣

¹¹⁾長老、裁き人として。もししくは律法学者、法律精通者として競技に模したるものであろう。

¹²⁾オリンピック競技に模したるものである。

¹³⁾ティロのヘルクレス、太陽神メルカルト。

¹⁴⁾普通のドラクマの倍額、即ち約二十二ドル。

¹⁵⁾ギリシャ語本は「即位式」。

され居りし時、アンティオクスは、彼がおのれの王国の政事に反対なるを知りて、おのが利を慮い、其処を去りてヨツペに赴き、またそこよりイエルサレムに上れり。ニ彼ヤソン及び市より盛んなる歓迎を受け、炬火と歓声との裡に入城し、それよりその軍隊を率いて、フェニキアに向かえり。三三年の後ヤソンは、王に金¹⁶⁾を届け、且緊急なる用件に関する答を伝えしめんために、上述せるシモンの兄弟、メネラウスを遣したり。然るにこの者は、權勢大なる人の如く裝いて、王に取り入り、ヤソンよりも銀三百タレントだけ多く与えて、

己がために大司祭職を横取りしたり。三五かく彼、王の命を受けて帰りしが、何

一つ司祭たるに応わしき所なく、殘忍なる暴君の心と、猛獸の狂暴とを有するのみなりき。三六ここにおいて、己が兄弟を陥れたるヤソンは、却つてその身の欺かれ、逐われてアンモン人の國に逃亡者となるに至りぬ。ニセメネラウス乃ち首位権を獲しが、王に約したる金錢は、城塞の司令官たるソストゥラトウスが支払を要求したるにも拘らず、少しも納めざりき。三七蓋し彼には、貢税徵収

(16)約束の金額

二九

の任務ありしなり。この故に兩人は共に王の許に召し出され、二九メネラウスは司祭の職を免ぜられて、その兄弟リシマクス之が後17)を襲い、ソストウラトウスはキプロス人の総督となれり。三〇是等の事件ありし間のことなりき、タルソスとマロスと17)の人々、その地王の愛妾アンティオキスに贈与せられしに由りて、18)暴動19)を起せり。三一されば王はその側近者中の一人アンドロニクスを代理として残し置き、これを鎮めんとて急ぎ来れり。三二然るにメネラウスは物を取るに折こそよけれど、聖殿より黄金の器具若干を盗み出してアンドロニクスに贈り、その他之の物は之をティロ及びその附近の市邑にて売り払えり。三三オニア、ダフネ19)附近なるアンティオキアの安全なる所に居りて、これを確かめ知るや、彼を詰責したり。三四是においてメネラウス、アンドロニクスの許に來りて、オニアを殺さんことを願いたれば、彼オニアの許に至りて、誓いつつ右手を差伸べ、（その疑惑を受けたるにも拘らず）彼を説き伏せて避難所より出で來らしむるや、忽ち正義を

17) キリキアの大きい町々。

18) 王たちが自分

分の目をかけ

ようと思う人

々に、一つま

たはいくつか

の町からの收

入を割当てた

古代の習慣。

喀前一〇・八

九参照。

19) 神聖な森があつて亡命者庇護権を有するアンチオキアの郊外都市

三五

顧みず、之を殺せり。三五この故に、独りユデア人のみならず、他の諸国民も憤慨し、かくも偉大なる人の不法にも殺害せられたることを遺憾に思えり。三六しかして王のキリキア地方より帰還するに及び、アンティオキアのユデア人ならびにギリシャ人も、彼の許に至りて、オニアの不法に殺害せられたることを訴えたり。三七さればアンティオクスは心にオニアを悼み哀しみ、故人の謹直と謙遜とを追憶して、同情に堪えず涙を流しけるが、三八怒りにもえ、命じてアンドロニクスの紫の衣を剥がしめ、全市中引き廻しの上、そのオニアに不義を加えたる同じ場所にて、この不敬なる者の生命を奪わしめたり。かく主は彼に報いるに、応わしき罰を以てし給えり。三九さる程にリシマクスは、メネラウスの勧めに従い、聖殿において多くの瀆聖を犯し居りしが、その尊拡まるに及びて、衆人リシマクスを責めんと集まりしも、そは既に多くの黄金持ち去られたる後なりき。

四〇群衆乃ち忿怒心頭に發し、暴動を起しけるに、リシマクスは約三千人に武装せしめ、年齢にも悪虐にも長けたる暴君の如き者を指揮者として、弾圧を始めたり。四一されど人々はリシマクスの企図を知るや否や、或者は石を、或者は大き根棒を取り、また或者は

三九

三八

三七

三六

四一 四〇

灰をリシマクスに投げつけたり。四二 彼等の多くは傷つき、仆るるものありて、皆
 敗走し、瀆聖者とくせいしゃその人もまた、宝庫たからぐらの傍かたわらにて殺されたり。四三 是においてこれら
 の事につき、メネラウスに対する取調べ開始せられたり。四四 即ち王ティヨロに來
 りし時、長老等より遣されたる三人の者彼の前にこの事を陳情せり。四五 然るに
 メネラウスは非を覺りて、王の説服に当らしめんため、多額の金を与えると
 トレメウス²⁰⁾に約束しければ、四六 プトレメウスは王の許に行きて、涼まんとす
 るが如く、之を或庭に連れ出し、その決心を変えしめたり。四七 彼乃ちあらゆる
 惡事を行いたるメネラウスを免訴しけるが、たといスキト人の許に告訴したり
 とするも、²¹⁾ 無罪の判決を受くべきかの人々には、哀れにも死刑を宣告せり。
 四八 かくて市と民と聖なる器とを擁護したる人々は、直に不当なる刑に処せられ
 たり。四九 この故にティヨロの人々さえも憤慨して、能う限り立派に、その葬儀を
 営ましたり。五〇 一方メネラウスは権力を握れる者の貪慾に乗じて、その軀に
 居据わり、ますます悪虐あくぎやくをほしいままにして、同胞に仇しつつありき。

²⁰⁾本八
 照。
²¹⁾スキ

ト人は
 ギリシ
 ャ人や
 ローマ
 人には
 野蛮人
 と思わ
 れてい
 た。

第五章

ヤソンの悪虐とその最期—アンティオクス聖殿の物を掠奪す

一その頃りアンティオクス、第一次エジプト遠征の準備をなしけるが、三時しもイエルサレム全市にわたりて、四十日の間、

金色の衣を着け、槍を持てる騎士の、群をなして上空を馳せまわるが見られたり。三その陣立したる騎士隊、二手に分れて互に合戦しけるが、楯は揺れ動き、冑を着けたる者等は群がりて抜刀を打振り、投槍は飛び、黄金のあらゆる種類の武器と甲冑とは燐めけり。

四されば人皆この異象の吉兆ならんことを祈れり。五然るにアンティオクスの死したるが如き虚報伝わりければ、ヤソン、六千人を下らざる兵を率いて、俄に街を襲いたり。街の者等は石垣へと馳せ集まりたれども、街は遂に占領せられ、メネラウスは城に逃げ入りたり。六さてヤソンは容赦なく己が

第五章 1)西紀前一七〇年。—2)四十という数は天主の御罰や御恵みに特別な意義を持つてゐる。

3)天に異象が現われるのは、近々戦争が起るこという前兆であつた。ヨゼ

フス・フラヴィウスによれば、ティトウスがイルサレムを滅ぼす前にも同様な現象があつたと。

4)アンティオクスは彼から大司祭職を剥いでメネ

同胞を殺戮し、同族に對して勝利を得ることが最大の不幸なる所以を思わず、彼等を同胞にあらず、敵なりと認めて、之より財物を掠奪せり。セカリながら彼は主權を握るに至らず、叛逆の報いとして終には恥辱を蒙り、再び亡命者となりて、アンモン人の地に赴きしが、八よいよ最期の時近づき来れり、即ち彼アラビア人の暴君アレタスに囚われたれど、脱れ出でて邑より邑へとさまよい、すべての人より律法に背ける呪うべき者として、祖国と同胞との敵として、憎まれ、エジプトに追放せられたり。多くの者を祖国より追い出したる彼は、ラケデモニア人の許に赴き、同族たる故に⁶そこならば避難の所を得らるべしと思ひしが、異郷に客死するに至れり。○多くの者を埋葬することもなく投げ棄てし彼は、その身も哀悼せられず、埋葬せられず、異国の葬儀をすら當まることもなく、父祖の墓に共々葬らるることもなくして、打棄て置かれたり。ニ是等の事の次第かくの如くなりしかば、王はユダヤ人が同盟を廢棄せんとするものと疑い、そ

ラウスに与えた。彼はその間アンモン人の地にいた。
5)ヤソンは同胞を最も憎い敵のようにはつた。
6)喀前一一二。

一三

のために甚しく怒りてエジプトを出發し、武力にて街^{アラビア語}を占領し、二三途にて

会う者を容赦なく殺し、且家々にも踏み入りて殺戮を行ふことを、兵士等に命

じたり。一三されば若きも老いたるも屠られ、女子供も鑿殺にされ、処女も乳児

も殺されたり。一四この全三日間に殺されたるは八万人、捕えられたるは四万

人、売られたるも、その数これを下らざりき。一五されど彼はこれにも飽き足ら

ず、不敵にも、かの律法と祖国とを売りたるメネラウスを案内者として、全地

よりも聖なる神殿にさえ押し入り、一六他の王等や諸市より其所の裝飾及び尊崇

のために奉納せられたる聖具を、その邪惡なる手に収め、勿体なくも粗略に取

り扱いて之を瀆せり。一七かくアンティオクスは心迷いて、天主が市の住民の罪

ゆえに少時の間怒り給い、それに由りてこの聖殿がかかる恥辱を蒙りたること

を、慮わざりき。一八然らずして、彼等がもしかも多くの罪に包まれおらずと

せば、彼もまた先に宝物掠奪のためセレウクス王より遣されたるヘリオドル

スの如く、踏み入るや否や、忽ち鞭打たれて、その不遜なる振舞を止められた

ルサレム。一

喀前一

以下。

・二二

一九 るべければなり。一九されど天主は地のために國民を選まず、國民の

ために地^ちを選み給^{たま}いたり。⁸⁾二〇この故にその地もまた民の惡に与りたれど、後^{のち}にはその幸福に与らん。今全能の天主の御怒に触れて捨てられたるも、大なる主^{おおい}の御心解けんか、再びいと高き光榮に挙

げらるべきなり。二一さてアンティオクスは聖殿より一千八百タレン

ト⁹⁾を奪^{うば}いて、急ぎアンティオキアに引き揚げけるが、意氣あがりて、その心の傲れるは、陸上^{りくじょう}を船^{ふね}にて行き、海上^{かいじょう}を徒步^{徒歩}にて渡ること

とさえなし得べしと思えるほどなりき。二二彼^{かれ}また民^{たみ}を苦しめんと

て、監督者等^{かんとくしゃら}を駐^{とど}め置けり。即ちイエルサレムにはフイリギア生^うま^るれのフイリップス¹⁰⁾を置きしが、この者は之^{これ}を任命したる者に優^{まさ}りてその性殘忍なりき。二三ガリチム¹¹⁾にはアンドロニクス¹²⁾とメネラウスとを置きしが、彼等^{かれら}は他の者よりも市民に辛く当れり。¹³⁾

二十四 なお彼^{かれ}はユデア人を敵視せるに由り、かの憎むべき軍將アポロニ

⁸⁾可二・二七で主が安息日について仰せられたことを参照。

⁹⁾ユデアのタレントは銀一タレントが約千八百ドル、金一タレントが約三万ドル。シリアのタレントはその半分ほど。

¹⁰⁾喀前六・一四参照。

¹¹⁾サマリアにある。

¹²⁾前記(本四・三以下)の者ではない、彼はアンティオクスに殺されたから。

¹³⁾同胞であるにもかかわらず。

ウス¹⁴⁾に二万一千の兵^{へい}を率^{ひき}いしめて之^{これ}を遣^{つかわ}し、命^{めい}ずるに成人^{おとな}を鑿殺^{みなごろし}にし、婦人^{おんな}と若者^{わがもの}とを売るべきことを以てせり。ニ五^五彼乃^{かれ}ちイエルサレム^{きた}に來りて

二六
平和を装いつつ、静かに安息の聖日15)を待ちしが、いよいよその時至りてユデア人等祭を行うや、部下の者どもに武器を執ることを命じ、之を見ると外に出でたる者を悉く虐殺し、武装せる人々を率いて市中を馳せ廻

二七
り、おびただ夥しき民衆みんしゆうを亡なき者ものにせり。ニセざる程にユダ・マカベオは他の九人九人くじんと

とも
と共に、荒野に退き、そこの山の中で同志と野獸に伍して暮し、草を食い
つつ滯まりけるが、これ穢れ^{けがれ}₁₆₎に染まざらんとてなりき。

第六章

アンティオクス宗教に忠なるユダヤ人を迫害す—エレアザルの殉教

一その後久しうして、王アンティオキアリの一老人を遣し、ユデア人等に強いて、その父祖と天主との律法を棄てしめ、ニイエルサレムにある聖殿を汚して之をオリンピアのジュピターの宮、ガリチムにあるそれは、

第六章 1) 本五 ・二四以下参 照。ギリシャ語本は「アテネ」。

○以下参照。

15) 喀前二·三

二以下。九。

四三以下參照
16) 偶像礼拜。

その地に住む人々にふさわしく、客のジエピター聖殿と称ばしめければ、^三醜悪にして由々しき弊風、滔々として一般に及びたり。^四即ち聖殿は遍く異邦人の遊蕩饗宴の場と化し、彼等は遊女と共に淫行に耽り、女は毎に聖なる建物に推し入りて、許されざる物を持ちこみ、²⁾五祭壇にもまた、律法に禁ぜられたる宜しからぬ物盛られたるなり。六また人々安息日をも守らず、父祖の祝祭も行わず、誰も自らユデア人なりと、明白に名のることをせざりき。七これに反して彼等王の誕生日には犠牲を献ぐることを厳しく強制せられ、バッカスの祭には常春藤の冠を戴き、バッカスを讃うるため行列して練り歩くことを強いられしなり。八またプトレメオ人³⁾の入智慧にて、附近の異邦人の市邑⁴⁾にも布令出でたり、そは彼等もまたユデア人に對して同様に行い、これをして犠牲を獻げしむべく、九異邦人の風習に従うことを欲せざる者は、これを死刑に処すべとなり。是において人々憂き日を見るることはなりぬ。一〇即ち二人の婦人已が子に割礼を受けしめたる廉にて告訴せられたるに、人

²⁾例えばユデアの律法による豚、犬など不淨な肉。喀前一・五〇一五参考。³⁾本四・五にあるプトレメウスの家來たちをさす。⁴⁾ユデア人が多数住んでい

々彼等の胸にその幼児を掛け、市中を曳き廻し、石垣より直逆様に突き落したり。二また附近の洞窟に集りて、窺かに安息日を守り居たる他の人々は、フイリップスに密告せられ、火焔もて焼き殺されたり。そは彼等宗教の掟を守るゆえに、己が手もて身を衛ることを躊躇いたればなり。三今私はこの書を読まんほどの人々に、是等の災厄に驚くことなく、是等の出来事がわが国民を滅ぼさんためにあらずして、懲治しめんためなる所以を思わんことを冀う。三そは、罪人が時久しく、ほしいままに振舞うことを許されずして、間もなく報復を受くるは、大なる恩恵の徵なればなり。四實に、他の國民に対しては、主氣長に待ち給いて、審判の日来るや、その罪の充満てるに従いて彼等を罰し給うべしと雖も、一我等に対しては、我等の罪がその極に達するに及び我等を罰するが如きことはなし給わず。一されば彼は決して我等より御憐憫を取り去り給わず、たといその民を不幸もて懲らし給うとも、之を棄て給わざるなり。二されど我等は是をただ一言、読む人々の警となすに止め、これよりまた旧の

一八 物語に帰るべし。一八さて律法學士の中最も重きをなせる者の一人にして、齡長

け顔容麗しき、エレアザルという人は、無理に口を開かれて、豚肉を喰わしめられんとしたれど、⁶⁾一九厭わしき生を送らんよりは、寧ろ榮ある最期を遂げ

んものと、拷問を受くべく進み出でたり。二〇彼はかくの如く之を受くるを義務なりと思ひ、よく忍耐し、生命を惜しむために、許されざることは何一つなさ

じと決心したるなり。二二その場に居合せたる者等は、その人にに対する旧き友誼よりして、誤れる同情を催し、窃に彼を傍に連れ行きて、王が命じたる如く、

犠牲の肉を食せりと見せかけんため、食するも差支なき肉を持ち来り、二三かくて彼を死より救わんと囮れり。彼等が彼にかく人情をかけしは、その人に對する旧き友誼に由れるなりき。二四されど彼はその長老にして老齡の者たる威嚴と

名門に生まれて白髮に至りしことと、また少時よりの善き行状とを思ひて、天主に立てられたる聖なる律法の規定のままに、直に答えて、寧ろ冥界に送られんことを欲むと云えり。二五即ち彼云いけるは、佯るはわが年輩に相應わしか

る肉を食する事との禁令は利一一七にあり。

らず、かくては年少き多くの人、エレアザルは九十の齡にもなりて、異邦人のことくにひと

生活をなすに至れりと思ふことあらん。二五 しかして彼等、わが偽りと少時の惡

しき生活とに由りて、謬らるべく、我はまたそれによりてわが老いの身に汚辱

と呪詛とを招くべし。二六 蓋し、我たとい現世において人間の責苦は免るとも、

全能なる者の御手よりは、生くるも死するも、逃ること能わざらん。二七 この故に我は雄々しく生命を棄てて、長老らしく振舞わんとす。二八 我もし最も尊む

べく最も聖なる律法のために、快く從容として名譽の死を遂げなば、年少き人々に剛毅の模範を遺すこととなるべし、と。かく云い終るや、彼直に拷問台に

曳き行かれたり。二九 彼を曳き行きし、少時前まで優しかりし者等も、彼の云いし言が、傲慢より出でたるものと思いしが故に、怒るに至れり。三〇さて彼鞭打

たれて將に死なんとするに当り、呻きつつ云いけるは、主よ、汝は聖なる智慧りを有し給う者なれば、我が死を免れ得べかりしも、身に苛き責苦を受けお

るを知り給う。さりながら我は汝を畏るるが故に、魂においては快く之を堪え

7) 天主の全知

二九

二八

二七

二五

忍ぶなり、と。三一かくかれは生命を棄て、ただに年少者にのみならず、全國民に、その最期の思い出を遺して、高徳と剛毅との龜鑑となれり。

第七章

七兄弟とその母との榮ある殉教

茲にまた七人の兄弟の、その母と共に捕えられ、律法に背きて豚肉を食せよと、王に強いられ、そのため鞭や革紐もて責められたることありしが、三その中の一人、即ち長子なる者、かく云えり、汝我等より何を求めるか。我等は父祖より伝えられたる天主の律法に違背するよりも、寧ろ死する覚悟なり、と。三王乃ち怒りて、鍋と青銅の釜とを熱すべしと命じ、その熱するや直に、四残余の兄弟および母の見つつある所にて、かの最初に口を利きし者の舌を切り、頭の皮を剥ぎ、二手足の先をも切り落せと命じたり。五既にしてその全身斬り苛まるるや、彼また命じて、之を火のある所に搬ばし

第七章 ①多くの教父が説教の主題として称賛しているいわゆるマカベオの七人兄弟。
 ②ギリシヤ語本には「スキト人の如く」とあり。
 野蛮人と目されていたスキト人は捕虜たちによくそうした。

め、なお氣息あるを鍋に入れて焙らしめしが、彼のその中にて長く苦悶せる間あいだ、なか六・三。

二・三
申三

時代に
も肉身
の復活
に対す
る信仰
があつ
た一証

他の者等は母諸共、雄々しく死すべしと互に相励まして、云いけるは、主なる天主、誠を照覧して、我等を慰め給うべし、そはモイゼがその頌歌に告白して、主その下僕等を慰め給わん、と言明せるが如し、と。³⁾ さてかくの如くにして、かの長子死するや、人々次の者を嘲弄せんと引き出し、その頭の皮を髪の毛諸共剥ぎ取りたる後、全身にわたり、四肢の一つ一つを斬り苛まれざる内に、食せんとするかと、問いしに、八⁴⁾ 彼己かれおのが國の語にて答えて云いけるは、我然なさじ、と。この故に彼もまた最初の者と同じ責苦を順次受けしが、⁵⁾ その最後の息を引き取らんとする時、かく云えり、極惡なる者よ、汝は實に我等の現世の生命を奪う。されど世界の王はその律法のために死する我等を、永遠の生命に復活せしめ給うべし、と。⁴⁾ 一〇次に第三の者嘲弄せられけるが、求めらるるや、直に舌を出し、從容として両手を差し伸べ、ニ⁵⁾ 豁然として云いけるは、我、是等のものを天より授かりたれど、今天主の律法のために之を軽んず、そ

は我、是等を再び主より賜わることを希望すればなり、と。ニされば王も、その側づきの者等も、責苦をものともせぬ若者の勇氣に驚きたり。ニこの者もまたかくして死するや、人々第四の者をも同様に責め苦しめたり。一四既にして彼死せんとするに方り、かく云えり、人によりて死に付さるとも、天主によりて再び復活せしめらるべしとの希望を抱くに如かず。蓋し汝は生命に甦ることあらじ、と。⁵⁾ 一五茲において人々、第五の者を引き出して、責め苛みけるが、彼王を見つめて云いけるは、一六汝は朽つべき者ながら、人々の間に權を持てるが故に、欲するままに事を行う。されどわが國民が天主に棄てられたりと思うなかれ。一七汝暫し待てかし、さらば彼の大能と、主が汝及び汝の裔を責め苦しめ給う様と見るべし、と。一八次に人々第六の者を引き出せり。彼死に瀕してかく云えり、汝徒に思い誤るなかれ、蓋し我等は天主に背きて罪を犯したれば、己がためにかく苦しみにあえるなり。されば驚くべき事我等に行われたり。一九然れども汝罰せられずにあるべしと思ふなかれ、そは汝天主と戰わん

5) 不敬
者も復活するが、「永遠の生命」にではなく「永遠の死」に至るため。

と試みたればなり、と。『わけても驚嘆すべきは母なりき、そは己が七人の子の一日の間に殺さるるを見ながらも、天主に希望を置けるが故に、快く耐えたればなり。』彼女は英智に溢れ、彼等の一人一人を、『己が國の語にて力強く励まし、婦人の情に丈夫の剛氣を合せて、』彼等に云ひけるは、『我はいかにして汝等がわが胎内にて形成られたるかを知らず、蓋は汝等に氣息、靈魂、生命を与へしは我にあらず、また汝等の各々に四肢を具えしも我にあらずして、』世界の創造主、人をその發生の際に形成り、万物の起源を定め給いし者にて在すなり。今汝等彼の律法のために身を軽んずるが故に、主は憐み給いて、再び汝等に氣息と生命とを与え給うべし、と。』さてアンティオクスは、蔑視まれたりと思ひながらも、罵倒の言を意に介げず、なお生き残れる末の者に向かい、ただに言を以て勧めしのみならず、誓を立てて、彼を富みて幸福なる者となし、且もし彼にして父祖の律法を棄てんか、取り立てて己が友とし、必要なる物を給すべしと断言せり。』されど若者は之に心を動かす氣色更になかりしかば、王は母を呼び寄せ、若者を救うよう計らうべしと勧めたり。』彼のさまさまに言を尽して説き

二七

勧めたる後、彼女もその子を説得せんと約束したり。二七彼女乃ち彼の方に身を曲め、殘忍なる暴君を愚弄して、己が國の語にて云いけるは、わが子よ、汝を九力月わが胎にやどし、汝に三年乳を与え、かくて汝をこの年輩に至るまで、はぐくみ育てし我を憐め。二八わが子よ、請う、天や地や、またその中にある万物を見て、天主がそれらの物をも、人類をも、無より造り給いしことを了れかし。二九さらば汝、この責むる者を怖ることなかるべし。汝の兄弟に恥じざる仲間となりて死を迎えよ。これ、我が主の御憐憫によりて、汝の兄弟と共に汝をも再び授からんためなり。三〇彼女の未だかく語り終らざる間に、若者云いけるは、汝等なお誰をか待てる。私は王の命ずる所に従わざして、モイゼが我等に与えし律法の命ずる所に従わん。三一されどヘブレオ人に加えられしあらゆる危害の主謀者たる汝は、天主の御手を免れざるべし。三二蓋し我等は自らの罪によりてかく苦しむなり。三三主我等の天主は、我等を懲らし矯め直さんとて、少時怒り給うと雖も、その下僕等と再び和ぎ給うべし。三四されど、極悪にして、

6) 天国
の幸福
は、天
主が御
憐みか
ら下さ
る賜物

三四

三

三〇

二九

二八

二七

すべての人の中最も罪深き者よ、汝、彼の下僕等に對して猛りながら、空しき望を抱きて溢りに思いあがるなかれ。三五蓋は汝未だ全能にして一切を照覽し給う天主の審判を免かれたるにあらざればなり。三六それ、わが兄弟は今少く時の苦痛を忍びたる後、永遠の生命の約束に与る者となりたれど、汝は天主の審判によりて、汝の傲慢に正当なる罰を蒙るべし。三七さりながら我はわが兄弟の如く、父祖の律法のために、わが身わが魂を獻げて天主に、その速かにわが国民を眷顧み給わんことと、汝が苦惱と打撃とによりて、ただ彼のみ天主にて在すと認むるに至らんことを、祈り求むるなり。三八また願わくは正義によりて、わが全国民の上に注がれたる全能者の忿怒が、我とわが兄弟とにて熄まんことを、と。三九是において王は怒に燃え、嘲弄せられたるを憤り、猛り立ちて他のいづれの者に對せしよりも彼に對して残酷に当れり。

四〇かくてこの罪なき者も、主に満腔の信頼を獻げつゝ斃れぬ。四一しかして最後にその母も、子等の後を追いて亡き数に入れり。四二さて犠牲と殘忍極まる

この警告の通りになつたことは、本九・五一二八參照。

こととに就きては、既すでに
に十分ぶんに語かたれり。⁸⁾

⁸⁾ アンティオクスがユデア人にその信仰ゆえに加えた残忍行為は、ただエレアザルとマカベオの七兄弟との殉教だけではなかつた。

第八章

ユダ・マカベオ、ニカノルと戦う

一 さる程にユダ・マカベオと之に従える人々とは、窃かに諸市に入るや、己おのが親戚友人を呼び集め、なおユデア教を守り居る人々をも味方に引き入れて、六千人を得たり。二かくて彼等主かれらに呼ばわりて、いづれの者にも蹂躪みみにじられしその民たみを眷顧かえりみ、不敬ふけいの徒輩ともがらに汚けがされし聖殿せいでんを憐あわれみ、三また今いまにも滅び果てんとする都みやこの荒廢こうはいを憐あわれみ、主しゆに叫ぶ血ちの声こゑりを聴き、四なお罪つみなき幼兒等おさなこらのいとも不法ほうに虐殺ぎやくさつせられたる²⁾と御名みなの流けがされたるとを憶おぼえ、これに対して御義憤おんいきどおりを發はつし給わんことを願えり。五さてマカベオはかく衆おおくの者ものを集めたれば、その勢あつ異邦人等ことくにびとらの抵あたるべからざるものとなりぬ。蓋そは主しゆの御忿怒おんいかり、転じて御憐憫おんあわれとナリたればなり。六彼乃ち不意に村々むらむらまちまちを襲おそいて之に火ひをかけ、便宜なによりよき処ところせんを占せん

領し、敵に少からぬ打撃を与えた。彼はわけても夜間にかくの如き襲撃を行ひ、その武名は到る処に拡まれり。^{3) 本五}八時にフイリップス³⁾は、この人の漸次優勢となり、そのなす事の殆ど毎も成るを見て、ケレシリアとフェニキアとの総督ブトレメウスに書を送り、王事に援助を与へんことを求めたり。^{4) 喀前}彼は時を遷さず、その最も信任せる者の一人、ペトロクルスの子ニカノル⁴⁾に、諸方の国より集めたる二万を下らざる武装兵を与えて、ユデア民族を全滅せんために遣し、なお戦争にかけて老練極りなき名将ゴルジアスを之に副えたり。^{三・三}一二を売りて調達する事となし、一直に使者を海の辺の諸市に遣して、ユデア人の奴隸を買い取らんと、人々を招き、一タレントにつき九十人を払い下ぐべき旨を約して、己が上にやがて全能者より下るべき復讐につきては顧慮する所なかりき。一にさてニダはニカノルの攻め来るを知るや否や、己と共に居りしユデア人等に之を告げたるに、彼等の中には、恐怖を抱き、天主の正義を信ぜずし

• 二二
八参照三・三
八参照• 二二
八参照

て、逃げ去りし者もありしが、^{一四}その他は残れる所有物一切を売り、同時
に主に向かいて、未だ来らざる内より、早くも己等を売り渡したる悪人ニ
力ノルより救い給え、^{一五}たとい己等のためならずとも、父祖になし給いし
契約のため、また彼等に冠して呼ばれし聖にして栄ある御名⁵⁾のため、然
なし給え、と祈願したり。一六さてマカベオは己が許に踏み留まりたる七千
人を集め、敵と和睦せず、また不法に攻め来る敵の多勢なるをも怖るること
となく、勇ましく闘い、^{一七}かつ彼等⁶⁾が、無道にも聖所に加えし冒辱と、
更に都になしたる侮蔑⁷⁾および不義と、なおまた父祖の規定の破棄とを、己
が眼前に置くべしと、求めたり。一八即ち彼云いけらく、彼等は武器と豪胆
とを恃みとすれど、我等が恃みとするは全能の主なり。彼は我等に向かい
来る者をも、全世界をも、胸せ一つにて滅ぼすことを得給う、と。一九彼な
おも父祖に与えられし天主の御祐助や、センナケリブの時代に十八万五千
人の滅ぼされたること、^{一九}ニバビロニアにてガラト人⁸⁾と戦いたることや、

⁵⁾ ヤーヴェの敵。⁶⁾ 王。下一九・三五。賽三七・三六。
⁷⁾ 「バビロニアにて」と場所が記してあるのは、アンテイオクス大王が叛逆したメデア総督モロンを攻めたガラト戦士の勇敢さは人口に讐讐していた。彼らは外

その間際に味方のマケドニア人は浮足立ちたれども、彼等は総数僅に六千なが
ら、天より御祐助ありしに由りて、十二万人を休し、之がために多くの利益を
得たることを彼等に思い出さしめたり。三人々は是等の言によりて、大いに勇
氣を得、律法と祖国とのために死せんと覚悟するに至れり。是において彼、
その兄弟なるシモン、ヨゼフ、及びヨナタスを、各部隊の将に任じ、各々に
千五百人ずつ兵を与え、三更にエスドラスが聖書を読み聞かせたる後、「天主
の祐助」を合言葉として授け、自らは第一隊を指揮してニカノルと戦を交えた
り。三全能者彼等を助け給いければ、彼等は九千人以上を殺し、ニカノルの軍
兵の大部分に傷を負わせて戦鬪力を失わせ、之を潰走の已むなきに至らしめた
り。三五かくて彼等は、己等を買い取らんとて來りし者等より金錢を取りあげ、
彼等を八方に追い行きしが、三六時なかりしに由りて帰り来れり。即ちそは安息
日の前日なりしかば、その故をもて彼等追撃を統げざりしなり。三七それより彼
等は武器と分捕物を取り集めたる後、御憐憫の最初の滴を下してその日彼等を

兵とし
て加わ
つたこ
とがよ
くあつ
た。 9)
ハネー
の誤写
喀前二
参 三・四
○以下 喀前 照。

二八 救い給いし主を讃えつゝ、安息日を祝いたり。二九 かくて安息日終るや、彼等は弱き者、孤児及び寡婦に分捕物を分け与え、残れるを己等とその下

僕等とのために取れり。¹¹⁾ 二九 かくなしたる後、皆もろともに祈祷を獻げ、憐憫深き主のその下僕らに對して全く御心を和げ給わんことを願い求めた

三〇 三。なおその上に、彼等は己等と戦いしティモテウス¹²⁾ 及びバッキデ

ス¹³⁾ に従い居たる者を一万人以上殺し、高き砦を占領し、夥しき分捕物

を、弱き者、孤児、寡婦のみならず長老等にも、等しく割當てて分配せ

り。三ついで彼等の武器を入念に拾い集めたる後、之を適當なる所に貯え、残余の歎獲物を携えてイエルサレムに上れり。三三また彼等はティモテウス

の許にありてユデア人をさまざまに苦しめたる極悪人、フイラルケスをも殺し、三三イエルサレムにて戦勝祝賀を行ひし時には、曾て聖なる門に火を放ちし者、即ちカリステネス¹⁴⁾が、或る家に逃げこみ居たるを焚き殺し、

その不敬に相應わしき報を之に与えたり。三四さてユデア人を売り渡さんと

11) この分配は

ダヴィードの定

めによつて行

われた。母上

三〇・二四一

二六参照。

12) 喀前五・六

以下。—13) 喀

前七・八以下。

14) ヘレニズム

の精神をもつ

ユデア人らし

い。

て、千人の商人を連れ來りたる、かの極悪非道たぐいなきニカノルは、
 三五主の御祐助ありしに由りて、物の数とも思わざりし者等に恥辱を蒙
 りたれば、その燐びやかな衣¹⁵⁾を脱ぎ棄て、國の中央を通りて逃げ
 しが、その軍勢潰滅せしため甚だしき艱難に遭い、ただ独りアンティ
 オキアに辿り着きたり。¹⁶⁾かくて前にイエルサレムの捕虜を売りてロ
 ラマ人に納むる貢税を集めんと約束したる者は、今や、ユデア人は天
 王を保護者として有するに由り、彼等は傷け難し、そは彼等彼に定め
 られたる律法を遵守し居ればなり、と公言するに至れり。¹⁶⁾

¹⁵⁾大將の軍服。
¹⁶⁾ヘリオドルスが罰せられて後言つたことを見よ。本書第三章、特にその三八十三九節參照。

第九章

アンティオクス王の悲惨なる最期

一時恰もアンティオクスは面目を失いて、ペルシャより帰り来れり。¹⁴⁾
 即ち彼はペルセポリス²⁾と称ばるる都市に侵入して、神殿を掠め、
 市街を制圧せんと試みけるが、民衆馳せ集まりて武器を執り、その軍

第九章 ①喀前六

• 一一六参照。
 2)喀前六・一にエ

勢を敗走せしめしかば、アンティオクスはこの敗走の後、恥辱を蒙りたるまま帰り来りしなり。三さて彼はエクバタナ³⁾の辺に至りし時、ニカノル及びテイモテウスの身に起りしことを聞き知りて、四忿怒に堪えず、己を敗走せしめし人々に蒙りたる不義をユデア人に負わせんと思いたれば、命じて戦車を急がしめ、止まることなく旅をしけるが、天の刑罰は早くも彼に臨めり。そは彼、イエルサレムに至りて、之をユデア人等の墓地と化すべしと、豪語し居たればなり。五されど一切を照覧し給う主イスラエルの天主は、医すべ否や、腸の甚だしき痛みと、身中の激しき苦しみと、彼を襲いしなり。⁴⁾六彼は数々の新しき拷問を以て、他人の腸を責め苦しめたれば、もとよりそは当然なりしかど、それにも拘らず彼は少しもその惡意を棄てず、⁵⁾七その上驕慢つのり、心中ユデア人に火を吐きかけんばかりにて、命じて事を急がせけるが、猛進する間に戦車より落ち、体に重き傷を負ひて、その手足甚だしく痛いた

リマイス
とある都
市。

³⁾もとの
メデア国
の首都で
後にペル
シヤの王
たちが夏
に避暑し
た所。尤

照。
4)代下一
六・九。

むに至りぬ。八かくの如く、人間の分際ごとをも忘れて高ぶり、海原の波浪なみをも意のままになすべく、高き山たかやまをも秤はかりにのせて量るべしと自ら思おもい居りし者は、今や地ちに倒たおされ、担架たんかにのせられて搬はばれ、身みを以て天主の明らかなる御能力おんぢからを証しょうすることとなれり。九そは、この不敬ふけいなる者の体より蛆うじうようよと匍はい出で生きながらその肉痛にくいたみつつ離はなれ落ち、軍勢ぐんせいもその悪臭あくしゅうには悩なやまされしほどなりき。⁵⁾一〇實に少時前までは、空の星そらにさえ達たつし得うべしと思おもい居りし者ものも、その悪臭あくしゅうの堪がたえ難ゆえき故に、誰たれひとりか一人昇ひくことを得ざりき。一一是において彼かれも天主の笞しもとを弁わきまえ初はじめたり。二三彼かれは今や己おのれさえその悪臭あくしゅうに得堪いたえずなりしかば、かく云いえり、天主てんしゆに服従ふくじゆうし、朽くつべき身みを以て天主てんしゆに等ひとしと思おもわざることなれ、と。一三またこの極悪人は、御憐憫おんあわれを蒙こうむる筈はずもあらざるに、主しゆに向むかいて祈いのりぬ。一四しかしして都みやこに急いそぎ行ゆきて、之これを平へい地ちとし墓ぼ地ちとせんと囮はかりし者は、今や之これに自由じゆうを与あたえんことを望のぞみ、一五ユダヤ人は埋葬まいそうする価値ねうちだになし、鳥とりや

(5)盲腸
炎ろう。

野獸の餌食にすべし、乳呑児までも悉く絶やさんと云いし者は、今や約するに、彼等をアテネ市民と同等に待遇し、一六曾て掠めし聖殿を立派なる奉納物にて飾り、聖具を増し、犠牲に要する費用を己が収入より出し、一七その上自身もユデア人となり、一八 地上のあらゆる処を遍歴りて、天主の権能を吹聴すべきことを以てせり。一八されど（天主の正しき審判彼に臨めるによりて）苦痛止まざりしかば、彼绝望して、ユデア人に嘆願の形式による一書を送れり、その内容次の如し、一九 いとも善良なる臣民ユデア人に、王たり將帥たるアンティオクス懇に挨拶し、その繁榮と幸福とを祈る。二〇汝等及び汝等の子等、共に健康にして、万事汝等の意の如くに運び居るとせば、我等洵に感謝に堪えざるなり。二一我、病の床にあれど、好意もて汝等を想起す。我ペルシャ地方より帰る時、重き病に罹りたれば、公益を図るを必要なりと思えり。二二私はわが身に絶望せず、却つて病の癒ゆることに多大の希望を抱くなり。二三さて、わが父が軍を率いて高原地方⁸⁾に入りし

6)すでにセレウクスやアンティオクス大王がしたように。本三・三参照。一七)即ち割礼を受けモイゼの律法を守る者となる。一どの程度までこの約束を真剣に考えていたかは不明。一八)エウフラト河東方の国々、殊にアルメニア

その時、己が後繼者として主權を受くべき者を示し、二四以て何事か不幸生じ、もしくは凶報に接したる場合も、諸州にある者、誰に最高の統治権が遺讓られたるかを知りて、動搖せざるよう図りしを慮い、三五是に加うるに近國ならびに隣國の君主等がいすれも機会を窺い、ひたすら事あれかしと待つを慮いて、我はわが子アンティオクスを王と定めたり。¹⁰⁾ 彼は我が高原地方に赴きし時、屢々汝等の多くの者に引き合したることあり。なお之に添えたる書簡は、我が彼に宛てたるものなり。二六されば我汝等に願い求む、汝等

(9)自分が死んだ場合など。

二五
二六
二七
二八
二九

イオクス
・エウバ
トルは当

公私両面において蒙りたる恩恵を忘れず、各々我とわが子とに忠誠を守らんことを。ニモそれ、我は彼が柔和、仁愛を以て事に当たり、わが旨を体して汝等に親切を以て臨むべしと、確信する者なり、と。二八かくて殺人者たり冒涜者たりし彼は、自ら他人を苦しめたる如く、甚だしき苦痛を受けつつ、異郷の山中にて¹¹⁾ 慘ましき最期を遂げたり。ニ九彼の乳兄弟たるフイリップス、乃ちその屍を搬びけるが、その後アンティオクスの子を恐れて、エジプトに行き

一四以下
喀前六。
参考。

• 10) アンテ
11) 西紀前
一六三年
タベで。

プロトレスメウス・フイロメトルの許もとに至いたれり。¹²⁾

第十章

聖殿と市街との潔め——ユダの他の勳功

さてマカベオと之に従える人々とは、主の御加護によりて、聖殿と都とを取り返しけるが、²⁾彼異邦人の辻々に築きし祭壇や宮を毀^{こぼ}てり。³⁾然る後彼等聖殿を潔めて、別に祭壇を造り、¹⁾火打石にて火を鑽^さり出し、²⁾一年にして、³⁾また犠牲を獻げ、香や、燈明や、供えのパンを置きたり。

かくなしたる後、彼等地に平伏して主に向かい、最早かかる災禍に陥れ給うことなく、たといいつの時にか罪を犯すことありとも、手柔らかに懲らし給いて、野蛮人等及び冒流者に付し給うなけれと願いたり。⁵⁾この聖殿の潔めの行われしは、恰もその異邦人によりて浣^{けが}されしと同じ日、

第十章 ①喀前四・四七参照。

¹²⁾喀前六・一四、五五、六三。
2) ネヘミアがふしぎにも再び発見した聖火は、シリア人が迫害の初めから消しておいた。これに再び点火するのは、「自然は清し」という古代人の考えに従い、自然的な方法によつた。
3) 大約の時を付け加えただけ。喀前一・五七を喀前四・五二以下と照合して見れば、俗用に供したのがちょうど三年間であつたことがわかるから。

五
四
三
二
一

六

即ちカスレウ月の一十五日に当りぬ。⁴⁾ 彼等少しく前には、幕屋祭を、野

二、五四参照。
4) 喀前四・五

獸の如く山中、洞窟において行いしことを思ひ出でつゝ、幕屋祭の法式に

5) 喀前四・五
九参照。

則り、八日の間喜びて之を祝ひたり。⁵⁾ せざれば彼等は首尾よく御自らの

6) それまでケ
レシリアとフ

所の潔めを果さしめ給える者に對して大枝、葉のある小枝、及び棕梠の枝を携え歩みたり。 ⁶⁾ また彼等は、ユデア国民たる者の挙りて是等の日を年

エニキアとの

毎に守るべき旨、一般の掟とし布告して命じたり。 ⁶⁾ 高名者と称ばれしア

彼はユデア人

ンティオクスの最期は、かくの如くなりき。一〇さて我等はこれより、戦の中起りたる災厄を要約めて、不敬なるアンティオクスの子、エウパトル

に目をかけた

の身に起りし事を述べん。二即ち彼王位を嗣ぎし時、フェニキアとシリアル

から疑われ、

との軍に將帥たりし、リシアスという者を國務總理に任じたり。ニそれ、

リシアスに取

マケルと称するブトレメウスは、⁶⁾ 特に曾てユデア人に不義を加えし故に、

つて代られた

彼等に對して飽くまで義を行ひ、平和を以て臨まんと決心したりしが、

三これがためエウパトルにその友等より訴えられ、且フイロメトルより委

うつた

ねられたるキプロスを去りしに由り、^ヨ 墨々國賊と呼ばれしかば、高名者ア
ンティオクスの許に奔りたれども、之にも疎んぜられ、毒を仰ぎて命を絶ち
たり。一四時にゴルジアス、その地方の總督となり、外國人を採用してしきり
にユデア人と戦いしかば、一五要害の地にある砦を守れるユデア人は、イエル
サレムよりの逃亡者を迎えて、闘わんと試みたり。一六さるほどに、マカベオ
に従える人々は、主に祈りて、己等を助け給わんことを願い、イドウメア人
の砦を襲撃し、一七力を尽して攻め立て、これらの処を占領し、遭うほどの者
を殺して、総計一万を下らざる人々を屠れり。一八然るに一部の者は遁れて、
防戦に万全の備蓄ある二つの甚だ堅固き塔に立てこもりたれば、一九マカベオ
は、シモン、ヨゼフ、^ヨ 及びザケオに、之を囲むるに足る数だけ彼等の部下
を残し、自らは更に急を要する戦場にと馳せ向かえり。二〇されどシモンに従
える者は、欲に駆られ、金錢に目がくれて、塔中にありし或る者に説き伏
せられ、七万^{まん}デイドラクマ^{マリ}を受け取りて、彼等の一部を脱出せしめたり。

アギリシ
ヤ語原本
は「彼が
地位にあ
らざるを
見て」の
意である
う。

ヨハネ。
二参考。
本八・二
五千ドル
約一万

ニこの事ことマカベオに伝えらるるや、彼かれ、民たみの長等おさたちを集め、彼等かれらが金錢きんせんのため兄きょう
弟だいを売りて敵のを遁のしたる罪つみを訴うつたえ、ニ次つづいでこの裏切者うらぎりものとなりし徒輩ともがらを死刑しけいに
処しょし、立所たちどころに二つの塔とうを占領せんりょうせり。ニミかく武器ぶきにつきても軍兵ぐんべいにつきても悉く
成功せいこうし、彼かれ一つの砦とりでにおいて二万まんに余る者あまを殺ころしたり。ニ四よ然しかるに、先さきにユデア
人に破はられたるティモテウスは、夥あまたしき外人部隊がいじんぶたいを招まねき、アジアより10)騎兵きへいを
集あつめて、武力ぶりょくによりユデアを占領せんりょうせんとする如く來きたれり。ニ五ごさてその近づくに
及び、マカベオ及び之に従つう人々ひとびとは、頭かぶに土ひれふを振りかけ、腰こしに毛衣けこうもを纏まといて、
主しゅに祈り、ニ六さい祭壇さいだんの下もとに平伏ひれふし、主しゅが彼等かれらに御憐憫おんあわれみ垂たれて、律法りつぽうに云いえる如ごと
く彼等かれらの敵てきの敵てきとなり、彼等かれらの仇あだの仇あだとなり給わんことを、願ねがい求めたり。11)
ニ七しち彼等かれらかく祈りて後のち、武器ぶきを執とり、街まちより遠とおく出いで行き、敵てきの近くちかに至いたりて停とど
まれり。ニ八ひ日出いよいよるや否いなや、両軍戦鬪りょうぐんたんかいを交えけるが、此方こなたはその勇敢なるに加え
て、主しゅを勝利しょくりと成功せいこうとの保証者ほしょうしゃとなしたれど、彼方かなたは専ら勇氣ゆうきを戦鬪たたかいに最も重もつとじゅう
要なるものとなしたり。ニ九たなか戰たたかいまさに酣たけなわなる時とき、黄金こがねの轡くつわに飾かざられし馬うまに跨またが

アジ 10) アジ
ア 北 部
殊に強
い馬の
産出で
名高か
つたメ
デアか
ら。川
出二
三。二
二。

る五人の騎士(12)、天より下りて敵前に現れ、ユデア人の先頭に立ち、
 三〇その中の二人はマカベオを間にはさみ、己が武器もて之を傷つかざる
 よう庇かばい護まもりけるが、彼等敵に向かいて、矢と電光とを放ちければ、彼
 等ために目くらみ混乱して仆れ、三一歩兵ほへい一万五百人と、騎兵六百人と、
 殺されたり。三二かくてティモテウスはガザラに逃れて、ケレアス(13)がそ
 の将たる堅き砦に入れり。三三マカベオ及び之に従える人々、乃ち喜びて
 四日の間か、その砦を囲みけるが、三四中に居る者等はその処の堅きを恃み
 て、甚だしく罵り、毒舌どくせつを吐きたり。三五されど五日目の夜明に至りて、
 マカベオに従える人々の中の若者二十人、罵倒ばとうによりて忿怒に燃え、勇
 敢にも石垣に近づきて之を攀登り、勢猛く躍りこみしかば、三六他の人
 々も同じく彼等に続きて乗り越え、塔と門とに火を放ち、罵倒したる者
 等を生きながら焼くに至れり。三七彼等満一日にわたりてその砦を荒らし、
 或る所ところ¹⁴⁾にて、潜ひそみ居りしティモテウスを見出して亡き者ものとし、その兄きょう

(12) ヘリオドルスを討つた天使のよう (本三・二五)、また後にユダを助けに来た天使のよう (本一・八)
 (13) ティモテウスの兄弟。本一〇、三七参照。
 14) ギリシャ語本は「空井戸」。ラテン語本は寫字者が Iacu (湖) を loco (所) と書き違えたのである。

弟なるケレアス及びアポロファネスをも殺せり。三八かくなしたる後、彼等、イスラエルに大事をなし彼等に勝利を与え給いし主を、讃美と感謝との歌もて頌榮えたり。

第十ー章

リシアス、ユダに破られ、和睦を求む—ローマ人最初の干渉

一その後久しうからずして、王の後見役にして親戚に当り、國の摂政たるリシアスは、事の次第を苦々しく思ひ、二歩兵八万と騎兵全員とを集め、ユデア人に向かい来りけるが、これ、都を占領して異邦人の住処となさんと考へ、三また異邦人の他の神宮の如く、聖殿によりて金を儲け、且司祭転を年毎に売物に出さんためなりき。四彼、天主の御能力を少しも念頭に置かず、夥しき歩兵と、數千の騎兵と、八十頭の象とを恃みとして、心驕り、五ユデアに入りて、イエルサレムを去ること五スタディウム¹⁾の狭間にあるベストラに近づき、その砦を囲みたり。六マカベオ及び之に従える人々は、諸所の砦²⁾の囲まれたるを知るや、悲歎の涙にくれつゝ、民一同と共に主に向かいて、そのイスラエルを救わ

七

んために、善き天使³⁾を遣し給わんことを願い求めたり。しかしてマカベオ
は自ら先んじて武器を執り、己と共に危険を冒して兄弟等⁴⁾を援くるよう、他

の人々を励ましたり。さて彼等諸共に心勇みて進み出でたるに、イエルサレ

ムの辺にて現れし白衣の一騎士、黃金の甲に身を固め、槍を揮いつつ彼等の先

に立ちて進みければ、彼等挙りて憐憫深き主を讃頌え、意氣大いにあがりて、
ただに人間のみならず、猛獸をも、鉄壁をも刺し貫かんばかりの勢なりき。

○かく彼等、天來の救援者と、彼等に御憐憫を示し給える主と共に、勇みたち

て前進し、ニ獅子の如く勢猛く敵を襲いて、その歩兵一万一千と、騎兵一千六
百とを付したれば、人々はみな敗走しけるが、これら多くは傷つき、僅か

に身を以て逃れたり。リシアスさえも、恥すべき様にて逃走し、辛くも危うき
を免れたるなり。されど彼は分別なき者にもあらざりしかば、その蒙りたる

敗北を自ら省みて、ヘブレオ人が全能の天主の御祐助に頼れる限り、之に勝つ
能わざと暁りしかば、彼等の許に人を遣して、正当なることには悉く同意し、

一四

一三

一二

九

八

³⁾本三

・二五

及び一

○・二

九、三

○にあ

つたと

同様。

⁴⁾ペト

スラで

囲まれ

て いる

人々。

且王を説きて彼等の友たらしむべき旨、約したり。一五是においてマカベオ、一同の利益を慮りて、リシアスの請を容れしが、凡そマカベオのユデア人に就きてリシアスに書き送りし事は、何にても王の容認す所となりぬ。一六そもそもリシアスがユデア人に宛てたる書簡の内容は次の如し。「リシアス、ユデアの民に挨拶す。一七汝等の遣したるヨハネとアベサロムとは、汝等の書簡を手交し、それに記されたる事を果すよう、我に請いたり。一八されば凡そ王に伝え得ることは、我悉く之を彼に打ち明け、彼は事情の許す限り、之を許可したり。一九故に汝等にしてもし協定に信義を守らんか、我もまた今後努めて汝等のために幸福を図らん。二〇されどその他件に就きては、我、これらの人者⁵と、汝等と折衝せしめんとてわが遣す者とに、一つ一つ言托げたり。ニ汝等健在なれ。第一百四十八年、⁶ ディオスコルス⁷の月二十四日。」三また王よりの書簡の内容は次の如し。

5) 汝らの使者たち。

6) マカベ後書はセレ

5) 汝らの使者たち。
6) マカベ後書はセレ
ウクス時代の年の起
算がマカベ前書より
一年だけ遅いので一
四八年は喀前の一四
九年に当たる。故に
西紀前一六五—一六
四年に相当。——ク
レタ島の人々の暦で
は、二月二十一日か
ら三月二十一日まで
のこの月をディイオス
クロスと称するから
これはそう解すべき
であろう。

「アンティオクス王その兄弟^{きょうだい}なるリシアスに挨拶す。^{おう}我等の父神々の列^{わづ}

^{8) 血族。}

に入りてより、わが王国にある人々の安らかに生活し、それぞれの業にいそしみ得んことは、我等の希^{くに}所^{ひとびと}なり。而^{ひとびと}て我等聞けるに、ユデア人等は、

喀前一〇
・一八参照。

彼等をギリシャの風習に移らしめんとせるわが父の意をうけがわず、飽くまで己^{おの}が風習を守らんと欲して、それ故にその律法の容認^{ゆる}されんことを、我等

^{9) 「和親を結ぶ」}

に願い出でたりと。^{二五}されば我等はこの民^{たみ}をも安んぜんと欲して、彼等のためにその神殿^{しんでん}を回復^{かいふく}せしめ、彼等をしてその父祖^{ふそ}の遺風^{いふう}のままに生活せしめ

10) マカベ

んことを望み、且然定むることとなせり。^{二六}この故に汝宜しく彼等に人を遣して、これに右手を差し伸ぶべし、^{二七}これ、彼等が我等の好意^{こうい}を識りて、心

人たちが認めていなかつた大司祭。

勇み、己^{おの}が幸福^{こうふ}を図^{はか}らんためなり。」と。^{二七}なお、ユデア人に宛てたる王の書簡^{しょかん}は次の如くなりき。「アンティオクス王ユデア人の元老院及びその他のユデア人等に挨拶す。^{二八}汝等もし健在^{けんざい}なりとせば、我等の望むが如し。我等

もまた健在なり。二九メネラウス¹⁰⁾我等の許に來りて、汝等が我等の所に居る

二九
二八
二七
二六
二五
二四
二三

本四・二
七、五〇
参照。

三〇

汝等の同胞⁽¹¹⁾の許に下り来らんことを欲める旨、伝えたり。三〇されば我等はクサンティクス月⁽¹²⁾の三十日までに来らんとする者に通行券を与え、ユデア人には前の如く、その本来の食物と律法とを用いしめ、且彼等の知らずして行えることに対しては、その何人にも、いかなる煩累もかけざらんと欲す。三二なおまた我等は、汝等と語らわしめんとて、メネラウスを遣したり。三三汝等健在なれ。第四百四十八年、クサンティクス月の十五日。

⁽¹¹⁾若に残されていてシリア人の捕虜となつたユデア人の第六月。今

⁽¹²⁾マケドニア

の四月。⁽¹³⁾ユデアの国

三四三五三六三七
と。三四ローマ人もまた次の如き書簡を寄せたり。「ローマ人の使者、クイントウス・メンミウス、及びティトウス・マニリウス、ユデア人民に挨拶す。三五王の親戚リシアスが汝等に許容したる事は、何にもあれ、我等もまた許容したり。三六されど彼が王に問い合わせざるべからずと信じたる事柄に就きては、汝等の間にて慎重に相談したる後、直に何人かを我等の許に遣され、これ、我等が汝等のために都合よきよう、決定することを得んためなり。⁽¹³⁾我等はまさにアンティオキアに行かんとするなり。⁽¹⁴⁾三七この故に、

事に対するローマ最初の干渉。⁽¹⁴⁾こう述べてあるのは、かれらにどこへ使者を遣わすべきかを知らせるため。

汝等の欲する所の何たるかを我等に知らせんため、取急ぎ返書を送れかし。三八汝等安かれ。

百四十八年ねん、クサンティクス月つきの十五日にち。と。

第十二章

ユダのヨツペ、ヤムニア、及びカスフインなどに対する戦い――

彼死者のために犠牲を獻げて祈ることを命ず

一 是等の契約結ばるるや、リシアスは王の許に帰り、ユデ

ア人等は烟仕事に携わりけるが、^二後に残り留まる人々、すなわちティモテウス、¹⁾ゲンネウスの子アポロニウス、²⁾同じくヒエロニムス、その他デモフォン及びキプロスの総督ニカノル³⁾は、彼等を安穩に生活さしめんとはせざりき。またヨツペの住民は、次の如き恥ずべき罪を犯せり。即ち彼等は己等の間に住めるユデア人を、恰も何の敵意もあらざる如く招待して、その妻子諸共、己等の用意し

第十二章 1) ヨルダン河東方諸州の總督。本一〇・三七に死んだとあるのとは別人。――2) ケレシリアの總督。タルセウスの子のアポロニウスとは別人。本三・五、七参照。――3) パトロクリスの子で、デメトリウスの時代に象部隊の長であつたニカノル（本八・九。一四・一二）とは別。「他の一人については不明。

四

たる船に乗らしめんとし、四街の公けの布告により、平和のためユデア人が何事も疑わずして受諾したるに、その沖合に出るに及びて、二百を下らざる人々を溺れしめしなり。五ユダ、己が同胞に加えられたるこの殘虐を聞くや否や、部下の人々に命を下し、正しき審判者たる天主を呼びて祈りたる後、六かの同胞の殺害者等に向かい行き、夜陰に乗じて港に火をかけ、船舶を焼き、火を遁れ出し者をば剣にかけて殺せり。七かくの如く是等の事をなしたる後、彼再び来りてヨツペの住民を麷殺にせんと思いつつ引き揚げたり。八然るに彼、ヤムニアの住民もその間に住むユデア人に同様なることをなさんと企めるを知りたれば、九また夜陰に乗じてヤムニアの住民を襲い、港と船舶とに火を放ちけるが、その火の反映は、二百四十スタディウムを隔てたるイエルサレムにおいてさえ、見えしほどなりき。既にして彼等そこでより九スタディウム進み、ティモテウスに向かいて押し寄せつつありし時、アラビア人⁶⁾の歩兵五千及び騎兵五百、彼等に襲いかかりたり。ニ戰鬪は激

4) 港の施設。5) ギリシヤ語本は「されどその所閉ざされおりしかば……と思いつつ引きあげた」。6) テイモテウスの部下なる

烈を極めるが、天主の御祐助によりて彼に幸あり、敗れしアラビア人の生き残れる者は、右手の与えられんことをユダに乞い、彼に牧場、及びその他有利益を与うることを約せり。ニ是においてユダも、多くの事に彼等の實に有用なるべきを思ひて、和を約しければ、彼等右手を与えられたる後、その幕屋に帰り行けり。ニ彼また橋と石垣とに囲まれ、諸国の民の打ちまじりて数多住めるカスフイン⁷⁾といふ名の堅き都市をも攻めたり。三四然るにその内におる者等は石垣の固きと糧食の貯蔵あるとを恃みて、心をゆるし、ユダに向かいて悪口罵言を浴せ、口にすべからざることまで云いたれば、一五マカベオは、ヨズエの時に石垣を碎く機械も、城攻めの道具もなきに、イエリコを陥落し給いし、世界の偉大なる主を呼び頼みつつ、石垣日がけて猛然殺到せり。一六かくて主の御旨により、この街を占領したる彼は、無数の人を殺しければ、附近にありし幅地を去り、行くこと七百五十スタディウムにして、カラカラに來り、トウビ二スタディウムの池は、殺されし者の血が流るるかと見えたり。一七彼等その

五・二 喀前 ある。の地にモアブの東、死海 9) 一〇。書六⁸⁾ う町。ンといカスボまたはフルカス三六あ六及び

ン人⁽¹⁰⁾と称ばるユデア人等の許に到りしが、一八ティモテウスは最早この地方に見当らざりき、そは彼何事もなし得ざる内に極めて強力なる守備隊を或所に残し置きて、引き揚げたればなり。一九されどマカベオ方の軍将ドンテウスとソシパテルとは、ティモテウスが砦に遣し置きたる兵一万人都殺せり。二〇さる程にマカベオは、兵六千を己^(おの)が周囲に配置し、これを諸部隊に分ちて、歩兵十二万と騎兵二千五百とを擁するティモテウスを擊たんと進みたり。⁽¹¹⁾ 二一ティモテウスはユダの来るを知るや、女子供、その他足手纏いとなる者等を、カルニオン⁽¹²⁾と称ばる砦に送りぬ、そはこの処難攻不落にして、路狭^(みちせま)きゆえに近づくこと難かりければなり。二二さてユダの前隊現るるや、敵は万事を照覽し給う天主の在すによりて、恐怖に襲われ、崩れ立ちて彼方此方に逃げ惑いしかば、大方は同志討ちのために仆れ、味方の刃にかかりて傷きたり。二三ユダは不敬なる者等を懲らしつつ、激しく彼等を追撃して、その内の三万人を仆せ

⁽¹⁰⁾トウビンまたはトブとはアラビアのガラードとの境界にある部分。⁽¹¹⁾喀前五・三七以下参考。⁽¹²⁾カルニオンとはヨルダオ^(カルナイム)市。喀前五・二六、四四参照。

二四
二五
二六
二七
二九
二八
三〇

り。二四 テイモテウスその人は、ドシテウスとソシパテルとの部下の手に陥りしが、彼、己の掌中には多くのユデア人の父兄あるにより、もし己死なば彼等の救わるる望絶ゆるやも知れずとの理由をあげて、種々嘆願し、己が助命釈放方を請い、二五且、契約に従いて彼等を送還すべき旨誓いたれば、人々同胞を救わんために、彼を害することなく放免したり。二六次いでユダはカルニオン¹³⁾に出征し、二万五千人を殺しぬ。ニセこれらの人を潰走せしめ、鑿殺にしたる後、彼は種々の国人の数多住める堅固なる都市エフロン¹⁴⁾に軍を進めしが、その石垣の前には、屈強なる若者等立ちて勇ましく防ぎ戦い、また城中には多くの兵器あり、飛道具の貯えも豊かなりき。¹⁵⁾されど彼等¹⁵⁾は、御力もて敵の軍勢を破り給う全能者を呼び頼みて、その街を占領し、中に在りし者の内一二万五千人を屠りぬ。ニ九彼等はそこを去りて、イエルサレムより六百スタディウム隔たりたる、スキト人の街¹⁶⁾に向かいけるが、三〇スキトポリスに住めるユデア人等は、市民より好遇せら

(13)ギリシャ語
本では「およ
びアテルガテ
イス（女神ア
タルテのシ
リア名）の神
殿」と付記し
てある。

14) 喀前五・四
六とその註參
照。——¹⁵⁾ユデ

ア人。——¹⁶⁾ス
キトポリスま
たはベトサン
喀前五・五二
参照。

三一
 三二
 三三
 三四
 三五
 三六
 三七
 三八
 三九
 一
 れ、不幸の時にさえも、情ある扱いを受けたる旨証言せしかば、三一彼等はこれに感謝し、なお将来も己が国人に好意を示さんことを勧め、七週の祭¹⁷⁾も近づきたれば、イエルサレムに歸れり。三二ペントコステ祭の後、彼等はイドウメアの総督なるゴルジアス討伐に赴きたり。三三一方彼は歩兵三千に騎兵四百を率いて出で来り、三四彼等戦鬪を交えけるに、結果はユデア人の仆れし者ただ少數に過ぎず、三五バケノルの騎兵の一人にして、ドシテウスと云える勇士、ゴルジアスを掴みたり。されどその之を生捕にせんとしたる時、トラキアの一騎兵彼に撃ちかかり、その肩を斬りしかば、ゴルジアスはマレサに逃れたり。三六エスドリンに従える者等の久しく鬪いて疲るるや、ユダ主に向かいて呼ばわり、御祐す助を下し、戦鬪を指揮し給わんことを願い、三七己が國の語もて鬪の声をあげ且讀歌を歌い出で、ゴルジアスの兵を撃ちて敗走せしめたり。三八ユダはそれより軍をまとめて、オドラム¹⁸⁾の街に入りしが、七日目も來りたれば、彼等習慣のままに身を潔め、その地にて安息日を守れり。三九翌日ユダは部下を伴い、仆れ

17) 過越
 祭から
 七週後
 に祝う
 ペンテ
 コステ
 祭。
 18) ユダ
 書一五
 • 三五
 参照。

たる人々の屍を収容し、父祖の墓に在るその一族と共ににして葬らんた
めに來りけるが、^{四〇}彼等見たるに、殺されたる人々の下着の下にはヤ
ムニアにある偶像に獻げられし供物の一部ありき。是はユデア人に對
して律法の禁する所のものなりしかば、¹⁹⁾ 是等の者の仆れしは、この
理由によること、すべての者に明らかとなれり。^{四一} 是において人々、
隠れたるを顯し給いし主の義しき審判を讚頌えけるが、^{四二} それより祈
禱にかかり、犯したる罪科を忘れ給わんことを願いたり。また四傳な
き勇士ユダは、仆れたる人々の罪ゆえに起りし事を目のあたり見しに
つけても、罪を避くべきことを民に諭せり。^{四三} なお彼は募金を行ひて
銀一万二千ドラクマ²⁰⁾をイエルサレムに送り、死者の罪のために犠牲
を獻げられんことを求めたり、²¹⁾ そは彼、復活につきて、善良敬虔な
心がけを有したればなり。^{四四} (蓋し、彼もし仆れたる人々復活すべ
しとの希望を有せざりせば、死者のために祈るは、余計にして無益な

¹⁹⁾ これは街を攻撃する時お守りとして身に付けていた。それは傷を受けないためであつたが、申七・二六にある捷で禁じられたが、一千八百ドル。ギリシャ語本には二千ドラクマとある。²¹⁾ このくだりはカトリック教会で、死者の週年記念ミサに書簡として朗讀され、煉獄存在の一証である。

ることと思ふべかりしなり。) 四五更にそは、彼、敬神の念もて永眠せる者には、大いなる恵の貯えられるを思いたればなり。四六されば、死者のために祈りて、その罪を解かれんことを求むるは、聖にして益ある思念なり。

第十三章

アンティオクス及びリシアス再びユデアに侵入す——その敗北——和親の更新

一 第百四十九年⁽¹⁾ ユダは、アンティオクス・エウパトルが大軍を率いてユデアに攻め來り、二また総督にして國の摂政なるリシアスも歩兵十一万、騎兵五千に、象二十二頭、鎌付戦車三百輛を擁して彼と共に来る由聞き知りたり。三メネラウスもまた彼等に与し、さまざまに偽りてアンティオクスに願う所ありしが、そは祖国を救うためにあらずして、己が最高聰に就かんことを望みてなりき。四されど王の王はこの罪人に對しアンティオクスの心を激せしめ給い、またリシアスもこれに、あらゆる禍の根原は彼なる旨を、それとなく吹き込みたれば、彼はこれを捕うるや⁽²⁾

第十三章

前六・二八一六

三参考。この出征に対する準備は西紀前一六三年に行なわれた。出征そのものは一六二年。
 (2)ギリシャ語本は「ベレアに引きゆき」。ベレ

彼等の習慣のままにその場において殺すべしと命じたり。五即ち其処には四方八方灰堆に囲まれたる高さ五十クビトの塔ありて、これより俯瞰せば奈落の淵を望む如くなりしが、六彼はそこよりこの瀆聖者を灰の中へ突き落すよう命じたり、そは人皆彼を死刑にせよと迫りたればなり。七律法を破りしメネラウスはかくの如き撻によりて、死刑に処せらるるに至り、土に埋めらるることだにばかりき。八實にそれには十分の理由ありしなり、蓋は彼、火と灰との聖なる天主の祭壇に対して、多くの罪を犯したるが故に、その身も灰の中に死すべき宣告を受けたればなり。九ざる程に、王は激しき怒に駆られて、父よりも苛酷にユデア人を攻めんと、進み来りけるが、一〇ユダ之を知るや、民に命じて、昼も夜も主に呼ばわり、そのいつもの如くこの度もまた、彼等を助け給わんことを、祈らしむこととしたり。一そは、律法と祖国と聖殿とを奪われんことを恐れたるが故にして、また、この頃漸く息をつくに至りたる民が、再び冒瀆の國民に従う者となるを容し給わざらんことをも祈らしむこととしたり。

アは今日のアレツボの所にあつたと思われる町

二二 彼等乃ち、みな打ち揃いてかくなし、三日^カの間引続き地に平伏して、涙し
 断食しつつ主の御憐憫を請い願ひけるが、それよりユダ、彼等に覺悟すべき
 ことをすすめたり。二三さて彼は長老等と協議して、王がその軍をユデアに進
 めて都を占領せざる間に、出征きて事の成行を主の定め給う所に委せんと決
 心せり。一四かく一切を世界の創造主たる天主に委ねつつ、彼、律法と聖殿と
 都と祖国と人民とのため、死に至るまで勇ましく鬪うべしと、己が部下を励
 まして、モディン³⁾の辺に軍を配置せり。一五しかして「勝利は天主のもの」
 といふ合言葉を己が部下に与え、選抜りたる勇ましき若人等を率いて、王の
 本營に夜討をかけ、陣中にて四千人、なお象の最も大なるをも、之に乗れる
 者等諸共殺せり。一六彼等かく敵陣を此上なき恐怖と混乱とに陥れ、勝利を獲
 て引き揚げしが、一七彼に主の御加護ありしに由りて、この事の終れるは夜明
 の頃なりき。一八かくて王はユデア人等の手剛きを思ひ知りければ、策謀を以
 て要害の地を取らんと試み、一九ユデア人の堅き砦なるベトスラ⁴⁾に軍を進め

3) ユダが陣したモディンは西北から攻めよせる敵に対する恰好の哨戒の場であつた。
 4) 喀前六・三一参照。イエルサレムの南にある砦。

しが、撃退されて失敗し、兵を失いたり。二〇この時ユダ、内に居る人々に、必要なる物を送れり。二二ここにユデア人の軍中に、ロドクスという者ありしが、敵に秘密を漏らしたれば、捜索逮捕の上投獄せられたり。二三王は累ねて⁵⁾ベトスラに居る人々と談判し、右手を与え、彼等のを受けて去れり。二四彼はユダと戦いて敗れしが、残されて國務に当たり居たるフイリップス⁶⁾のアンティオキアにて謀叛せる由を聞くや、心の底より愕きて、ユデア人等に懇願し、讓歩し、すべて正しと思わるる条件に誓約を与えて和解し、犠牲を献げ、聖殿を敬いて奉納物を献げ、二五マカベオを抱擁して、之をトレマイス⁷⁾よりゲレネ人の所⁸⁾に至るまでの総督となし領主となしたり。二五然るに彼、トレマイスに来るや、トレマイス人⁹⁾はこの友好条件に平かならずして、その協定を破るべしと憤慨せり。二六その時リシアス演壇¹⁰⁾に上り、理由を陳べて民を宥め、しかしてアンティオキアに帰れり。王の出征と退却との経緯かくの如し。

5) 一度目の急襲の後。 16) アンティオクス・エウバトルから攝政に任せられた。喀前六・一四参照。 17) 地中海北岸にありガザの南にあるフイリスト人の町ゲララ。 8) ガザの南にありの町トレマイス市民はユデア人に對して甚だ敵意をもつていた。喀前五・一五参照。

第十四章

アルキムスの裏切りとその結果——ラチアスの最期

一 然るに三年^{ねん}を経たる後、ユダ及び之に従^{したが}える人々は、セレウクスの子デメトリウス¹⁾が、雲霞^{うんか}の如き^{ごと}大軍と海軍とを率^{ひき}いてトリポリス²⁾の港に上陸^{じょうりく}し、便宜^{べんき}の地に進み、ミアンティオクス及びその将リシアスを防^きぎて、その地方を保持せる由^{よし}を聞きたり。茲^こにアルキムス³⁾という者あり、曾て大司祭^{だいしさい}たりしが、混り居りし頃、故意^{こい}に身を汚^{けが}したれば、最早^{もはやいか}如何にしても己^{おのれ}には救濟^{すくい}なく、祭壇^{さいたん}に近づく能^{あた}わずと見りて、四^四百五十年、デメトリウス王の許^{もと}に赴^{おほ}き、之に黄金^{こがね}の冠^{かんむり}と棕梠^{しゆろ}の枝^枝⁷⁾と、なおその他に聖殿^{せいでん}のものと覺^{おぼ}しき橄榄^{かんらん}の枝⁸⁾をも獻^{ささ}げけるが、その日には彼^{かれ}も黙^いし居^たたりき。されど彼^{かれ}はその狂愚^{きょうぐ}を發揮^{はつき}すべき好機^{よきおり}を得たり。即ちデメトリウスより会議^{かいぎ}に招^{まね}かれ、ユ

第十四章 ① 喀前七・一
参考。—²⁾トリポリスはシドン、テイロ、アラドス三都市からの移住者が建てた町で、これらの都市の北方にあつた。

③ 喀前七・九、二五参考。
④ ギリシャの風習とユダアの風習とが混じつていった時。—⁵⁾ギリシャの習慣を採用して。—⁶⁾王位のしるし。喀前一〇・二九参考。—⁷⁾勝利のしるし。喀前一三・三七参考。
⑧ 平和のしるし。

六 デア人の内情と画策との如何を問わるるや、^六彼答えけるは、ユデア人の中、

ユダ・マカベオを頭目とするアッシド人⁹と称ばるる者等は、戦争を醸成し、

騒擾^{そうじょう}を起し、國を安穏ならしめず。それ、我が父祖の榮譽即ち大司祭の職を

剥がれて、此処に來りたるも、^八一には王のために忠義を尽し、二にはわが同

胞の福利を圖らんとてなり。蓋^{けだ}しかの者等の邪曲なるには、わが國民を挙げて

少からず惱^{なや}まされ居るなり。^九されば、王よ、汝是等の事を一々知り給える今

は、乞う、あまねく人も知る汝の御仁慈によりて、わが國と民とのために計ら

い給わんことを。^{一〇}蓋^{けだ}しユダの生き存うる限り、國事安らかなること能わざる

なり、と。ニこの人かく語るや、友にしてユダに敵意を抱く他の者どももまた

デメトリウスを煽動せり。ニ茲において彼は直に、象隊の指揮者なるニカノ

ル¹⁰を將として、ユデアに遣し、ニ之に命を下して、ユダその人を捕えしめ、

彼に従える者等を擊ち散らしめ、アルキムスを大聖殿の大司祭に任せしむる

こととせり。一四ユダを憚りてユデアより逃げ出したる異邦人等は、この時、ユ

9) 喀前

二・四
二とそ

の註參

照。

三・三
八と七
八と喀前•二六
参照。

10) 喀前

デア人の不幸と敗北とは己等のために首尾よかるべしと思ひ、大挙してニカノルの許に馳せ参じたり。一五さてユデア人等は、ニカノルが攻め來り、諸國民が之と共なる由を聞くや、頭に土をふりかけ、御民を選み給いし者、明らかなる徵によりて己が分おのを庇かほい給いし者に向かひて、永遠に之を護り給わんことを願い、一六その指揮者しゃの命令の下、直にそこより出發し、デッサウ12)という村の辺にて出会えり。一七ユダの兄弟シモン、乃ちニカノルと戦たたかいまじを交えけるが、敵の不意に現れたるに、愕おどろき怖おそれたり。一八然るにニカノルは、ユダに従える人々の武勇と、その祖国そくこくのために戦う意氣の盛さかんなるとを聞き居たれば、血ちを流して事を決するを怖れぬ。一九それ故に、右手みぎてを与え且受けんため、¹³⁾ポンドニウス、テオドチウス、及びマッティアスを遣せり。二〇これにつきて久しく審議しんぎを行いたる後、総帥自ら軍にそのことを伝えたるに、和議わぎの提案ていあんを受諾じゆだくすることに皆同意みなどうい賛成さんせいしたり。二一されば彼等かれらは双方さうまいの密ひそかに会見けんすべき日を定め、人々その各々の席せきを運び来て設けたり。二二然れどもユダ

11)天主から啓示擁護者に選ばれたユ
12)他は一
13)和陸を申し入れてこれを得る。本
一三・二二など參照。

は命じて、武装せる兵を適宜の場所に居らしめたり。これ、敵が不意に何等かの危害を加うることを恐れてなりき。かくて彼等應わしき協議を行えり。ニミニカノルはイエルサレムに滯在したれど、何の惡事をも行うことなく、驅り集めたる軍隊を解散し、三四ユダを常に心より愛し、彼に傾倒し居たりき。ニ五彼はこれに妻を娶りて子を挙ぐべしと勧めしかば、彼は結婚して平和に暮し、彼等相親しみて日を送れり。ニ六然るにアルキムスは彼等相互の愛と契約とを見て、デメトリウスの許に至り、ニカノルは外国の利益を図り、國の仇なるユダを己が後繼者と定めたりと告げしかば、ニ七王はこの者の憎むべき讒言によりて、いたく怒り、激昂し、書をニカノルに送りて、友好の協定が意に適わざる旨言明し、且取急ぎマカベオを捕えてアンティオキアに送るべしと命じたり。ニ八ニカノルこの知らせを受くるや当惑し、かの人より何の害をも蒙らざりしに、協約を破棄せざるべからざることを、心苦しく思ひしが、ニ九王には逆らうこと能わざりしかば、命令をはたすべき好き機会を窺い居たり。三〇さる程にマカベオは、己に対してニカノルが情なく当たり、恒例の会合にも荒々しき態度を示すを見て、この情なき態度の原因は必ず善き事な

三一

14) 神殿

らずと悟りしかば、少數の部下を集めて、ニカノルの前より身を隠せり。三一彼はかの人に敢然出しぬかれたるを知り、最も偉大なる至聖殿に赴き、常の如く犠牲を獻げ居たる司祭等に向かいて、本人を己に引き渡せと命じたり。三二然るに彼等は彼に、その探ぬる者の何処に居るやを知らず、と誓言しければ、彼手を聖殿の方に差し伸べ、三三誓いて云いけるは、汝等もしユダを捕えて我に引き渡さずば、我この神殿を地に打ち倒し、祭壇を毀ちて、この殿を父なるバッカスに奉獻せん、と。三四かく云い棄つるや、彼は去れり。茲において司祭等は、手を天に伸べ、常にその国民の保護者にて在せる者に呼ばわりて、かく云いぬ、三五汝、何物を也要し給わざる万物の主よ、汝は御住居たる聖殿が我等の中に建てらるるを嘉し給いし者なれば、三六聖の聖なる者、万物の主よ、この程潔められしがかりなるこの家を、¹⁴⁾ 永久に汚穢なく保ち給え、と。三七茲にイエルサレムの長老の一人に、ラチアスという者あり、都を愛する人にして善き評判あり、その慈愛ゆえにユダヤ人の父と呼ばれたるが、ニカノルの許に訴えられたり。

照。

・三参

本一〇

三八 この人は時久しく、身を慎みて志操堅固にユデア教を守り、之を堅持するためには身命を拋つ覚悟ありき。三九さてニカノルは、ユデア人に対して抱ける憎惡の程を示さんとして、彼を捕えしめんと、兵五百人を遣せり。

四〇 盖は彼、これを惑わし得たらんには、ユデア人等に大打撃なるべしと思いたればなり。四一軍勢彼の家に押し寄せ、戸を破り、火を放たんとし、

かれ、今にも捕われんとする危機に臨むや、我とわが刃に伏したり。⁽¹⁵⁾ 四二即ち彼は悪党輩の手に陥りて、己が名門の生れなるに応わざる憂き目に遇わんよりは、潔く死せんとしたるなり。四三されど急ぎて傷は急所を外れたるに、群は既に戸口より押し入りければ、彼は氣強くも石垣まで馳せ行き、雄々しく群衆の上に飛び下りしが、四四その人々素早く身を躰して、彼が落つるを避けたるに由り、彼は頸の中程を打ち挫きたり。四五然れども彼なお息ありしかば、勇氣を振いて起ちあがり、血汐は夥しく流れ下り、身には重き傷を負いたれど、群衆の間を走りぬけ、四六峻しき巖の上に立ち、今や

15) サムソンのしたこと(士一六・三〇)や聖女アポロニアの殉教を思い合せよ。聖アウグスチノは、聖書がこの事件において称賛に値するとしているのはラチアスの行為ではなく、ただその動機と方法だけだと言ふ

殆ど血も尽きたるに、己が傷を撫み出し、両手に執り群衆目がけて投げつけ、生命と精神との主に向かいて、再びそれらを授け給えかしと呼ばわり、かくて絶命せり。

第十五回

ユダ幻に勇氣を得てニカノルと戦い大勝利を收む—跋文

一
二
三
四
五
六

さてニカノルは、ユダがサマリアの地にありと聞くや、安息日に総攻撃を加えんと思ひ定めたり。然るに余儀なく彼に従い居りしユデア人等云いけるは、かくも残虐無道の振舞をする事なく、聖となすべき日を尊び、万事を照覧しあたまをも残す者を崇めよ、と。かの不幸なる者、「安息日を守るべき日を守るべしと命じたる天の権力者」果たして在りや」と問いかれば、「彼等、「七日目を守るべしと命じ給いし権力者は、天に在す活ける主その方にこそ」と答えしに、「彼云いけるは、われは地上の権力者にして、武器を執り、王のためニ義務を果たすことを命ずるなり、と。されど彼はその企図をなしとぐること能わざりき。ニカノルは思ひ上りて驕慢の極に達し、ユダに対する勝利の公然の記念碑記念碑を建てんものと

第十五章
記念碑は、相手を破つた所にてる習慣であつた。

考かんがえ居おりしが、セマカベオは天主てんしゅより御祐助おんたすけを得べしと、満腔まんくうの信頼しんらいを抱きて常に希望きぼうを失うしなざりき。八彼かれは部下ぶかに異邦人等ことくにびとらの来襲らいしゆうを怖おぞれずして、曾て天よ

り受けたる祐助おもいを思い出で、今も全能者ぜんのうしゃの己等おのれらに勝利しょりを賜たまうべきを期待きたいするよう、訓戒くんかいを与あたえたり。九次ついで彼かれ、律法りつほうと預言者よげんしやとの語ごを彼等かれらに語かたり、また彼かれ等らが前まえに行おこないたる戦鬪たたかいの数々かずかずを回想かいどうせしめて、一層土氣そうしきを高たかめたり。一〇彼かれかく彼等かれらの心こころを引き立てたる後のち、更に異邦人等ことくにびとらの一ひと心こころと誓約せいやくの破棄はきとをも説き示しめし、

一一以もつて彼等かれらの各々おののおのをして、楯たてや槍やりによらず、有益よしなる言ことばや激励げきれいによりて武装武装せしめ、且かつ、信しんすべき夢ゆめを彼等かれらに告つげて、一同どうを喜よろこばせたり。一二さて、その幻まぼろしは次の如ごときものなりき。善良ぜんりょうにゆうわ柔和ようほう、容貌ようめいに威いあり、態度たいど慎つつましやかにして、話はなし振ぶり優美ゆうびに、少わかき時ときより徳とくを積つみたりし人ひと、前の大司祭だいしさいオニア、手てをあげてユデア人民じんみんせんたい全体ぜんたいのために祈いのり居おりしが、二三その後のちまた、高齡こうれいにして威光いちらうあること驚おどろくべき一人ひとりの人ひと、大なる美しさうつくに包つつまれて傍かたわらに現あらわれたり。一四時にオニア、応こたえて云いけるは、これぞその兄弟きょうだい等いたちなるイスラエルの民たみを愛あいする者ものなる、こ

2) 本三
四・三
四参照
3) ユダ
が尋ね
たのに
対し。

れぞ民のため、及び聖なる全市のために多くの祈禱をなす、天主の預言者イニ

レミアなる、と。一五イエレミア乃ち右手を差し伸べて、ユダに黄金造りの剣を

授けつつ云いけるは、一六天主よりの賜物なる、この聖なる剣を執り、汝これを

以て、わが民イスラエルの仇を仆すべし、と。一七かくの如く、士氣を高め、若

人の心を奮起たす力ある、ユダのいみじき言に励まされて、彼等は、聖なる都と聖殿とが危殆に臨めるに由り、武勇を以て事を決せんと、雄々しく防ぎ戦う

べき覚悟を定めたり。一八實に妻子兄弟親族に対する彼等の心配はさほどならず

して、その最大なる第一の懸念は聖殿の上にありしなり。一九されど街に居る

ものともまた、戦うべき人々の上を少からず憂いたりき。二〇さて一同決戦の近き

を期待せる所へ、敵は陣立を整え、獸と騎兵とを適宜の所に配置して攻め寄せ

たり。二一マカベオは、大軍の進み来り、その多種多様の武器を備えたると、獸

の猛り立てるとを望み見るや、手を天に差し伸べ、奇蹟を行ひ給う主、武器の

力によらず、思召のままに、勝利を相応わしき人々に賜わる者を呼びて祈れ

4)彼ら
はニカ
ノルが
前述の
威嚇を
実行す
るかと
思つて
心配し
た。

り。三三その彼の祈りて云いし所次の如し。主よ、汝はユダの王エゼキアの時代に、汝の天使を遣して、センナケリブの陣中に十八万五千人を殺し給いし者にて在せば、⁵⁾ 三三天の御主よ、今もまた我等の前に汝の善き天使を遣して、御腕の偉力に恐れ慄かしめ、三四冒瀆の言を吐きつつ、汝の聖なる御民に向かい来るかの者等を臆せしめ給え、と。彼かく祈り終えたりき。三五さる程にニカノル及び之に従う者等は、喇叭を吹き鳴らし、軍歌を歌いながら寄せ来りけるが、三六一方ユダと之に従える人々とは、天主に呼ばわり祈りつつ戦いたり。三七かく彼等、手にて戦い、心にて主に祈りながら、三万五千を下らざる人々を仆し、天主の御祐助を大いに喜べり。三八戦終りて、彼等喜びつつ引き揚げんとしたるに、ニカノルが武装したるまま斃れ居るを見出でたれば、三九大いに感激して喊声をあげ、己が國の語もて全能の主を讃頌えたり。三〇身命を全く抛ちて、同胞のため死すべき覚悟を定め居たるユダは、命じてニカノルの首をあげしめ、その手を肩と共に斬り取らしめ、イエルサレムに携え行かしめたり。⁶⁾ 三一彼そ

• 5) 本八
• 6) 喀前
七・四
七参考

ここに到るや、同胞ならびに司祭等を祭壇の前に召集め、また城内に在りし人々^{ひとびと}をも呼び来らしめ、三ニカノルの首と、その全能なる天主の聖なる家に向かい、尊大傲慢の態度もて差し伸べたりし憎むべき手とを、彼等に示し、三三なお命じて不敬なるニカノルの舌をも切り取らしめ、寸断して鳥に投げ与えしめ、その兇暴なる者の手を聖殿の向いに懸けしめたり。三四時に人々諸共に天の御主を頌えて云いけるは、その在す処を汚されず保ち給える者は讃むべきかな、と。三五彼またニカノルの首をも、城の上に高く梶けしめて、^さ天主の御祐助を証する明らかなる徵たらしめんとしたり。三六茲において一同共に相議り、この日を祝わずして過すが如きことの、決してあらざるよう定め、三セシリヤ語にてアダルと称する月の十三日、マルドケオの日^ひの前日に、祭を行うこととなしたり。

三八ニカノルの身の成行はかくの如くなりき。しかしてその時より都はへブレオ人の所有に帰したれば、我もまたここにてわが物語の筆を擋か

7) シリア人の諸將。—8) 尤一四
・一参照。

9) アダルの月は今二月後半と三月前半とに相当。マルドケオの日とは、アツスエルスの時代ニステルによつてユデア人が救われたことを記念する勝運祭。
帖九・二三、三

一参照。

三九

四〇

ん。三九もし之これが出来でき榮ほえよくして、歴史の態たいを具えたりとせば、そはわが望のぞみし所ところ、またもし到いたらざる点てんありとせば、乞こう、我われを諒恕りょうじょせられんことを。四〇蓋けだし常に葡萄酒ぶどうしゅのみを、もしくは常に水みずのみを飲のむは宜よろしからざれど、これらを交互こうざいに用もちうるは快ここるよきが如ごとく、叙述じよ述じゆつの仕方しおうも常に正確せいかくのみを念ねんとする時は、読者とくしゃに面白おもしろからざるべし。これを以もつて大尾おわりとせん。